目次

1 まえがき ……32
2 フリーの意味について ……33
3 ウィンチェスター・カレッジ創立前の
ウィンチェスターの教育 ……33
4 ウィンチェスター・カレッジ ……34
5 一六世紀前のロンドンの教育 ……40
6 セント・ポールズ・スクール ……41
7 クライスト・ホスピタル ……45
8 チャーターハウス ……51
9 シティ・オブ・ロンドン・スクール ……56
10 財団法人組織の学校 ……64
11 註 ……72
12 あとがき ……75

図表

地図 ウィンチェスター校入学生出身地 ……37
第一表 創立時代一覧 ……67
第二表 創立者別一覧 ……67
第三表 基本財産収入 ……67
第四表 無月謝生徒数 ……68
第五表 特別奨学資金 ……68
第六表 父母負担と財産収入 ……68
第七表 一九世紀学校財政 1 ……69
第八表 一九世紀学校財政 2 ……70

フリー・グラマー・スクールの特質について

池田良三

1　まえがき

イギリスには、校名にフリー・グラマー・スクールの名を冠した学校が、テューダー朝時代（一四八五―一六〇三）前後から、裕福な個人や同業組合の資金で多数創立されている。英語の読み書きを終った者に、ラテン語を教える中等学校として発達し、その中でも基本財産が多く堅実な経営を続けてきた学校は、数百年後の今なお、私立中等学校（パブリック・スクール）として、イギリス中等教育の中核をなしている。

私は本論文において、フリーの意味の考察からはじめ、フリー・スクールの実態を、最も早くカレッジとして創立されたウィンチェスター校、ロンドン最初のフリースクール、セントポールズ校、学校財産が寄付されて、四百年後に創立された、シティ・オブ・ロンドン・スクールなどの、創立者とその目的、学校財産の設定と管理、ここで教育された貧乏で優秀な月謝無料の奨学生、大学に派遣された特別奨学生制度などについて述べフリー・スクールの特質を明らかにしたいと考えている。

なお、ここで義務教育実施百年後の今日、これらの学校がイギリスの教育でどんな地位を占めているか、設立者別学校数を示しておく。

一、公立学校

(1) 州立学校（カウンティ・スクール）　一八、九二一校

(2) 有志団体立学校（ボランタリー・スクール）　一〇、〇五三校

内訳

(A) 管理学校（コントロールド・スクール）　四、五七二校

管理委員会は校長と宗派教育を行なう教師を任命するだけ、地方教育当局が経費全部を賄い、委員の三分の二を指命する。イギリス国教会派に属する学校が多い。

(B) 補助学校（エイデッド・スクール）　五、三二八校

管理委員会は宗教教育に責任をもち、校舎建築、増築に七五％まで補助を受けることができる。地方教育当局は委員の三分の一を指命し、宗教以外の教科に責任をもつ。全般的にはイギリス教会派が多いが、中等学校はカトリック教会派に属する学校が多い。

(C) 特殊協定学校（スペシアル・アグリーメント・スクール）　一五一校

一九三六年教育法で有志団体立中等学校に建築費の二分の一から四分の三の補助が与えられた。委員の三分の二は創立団体指名、宗教教育は管理委員の責任、維持費は管理委と地方教育当分で切半。

二、直接補助学校（ダイレクト・グラント・スクール）　一七九校

男子校八二、女子校九五、共学二、大部分初等科を併設する中等学校、政府から補助を受ける代償として、全座席の二五％以上を地方教育当局の公費奨学生（ステーツ・スカラー）に提供せねばならぬ。地方教育当局奨学生六〇％、両親負担の自費生二六％、後は何らかの補助を受けている。

三、独立学校（インデペンデント・スクール）　三、七六二校

内、優良校　一、五五〇

普通校　二、二一二

この種の学校は一切の公費を受けない、日本流の私立学校である。学校財産収入と父母負担の月謝で経営され、独立した管理委員会が管理している。この中の優良中等学校二九九校だけをとってみると、生徒数一校平均二五三名、教師一人当生徒数一二・五人となっている。先に述べたパブリック・スクールは、独立学校の男子校約一五〇校と、直接補助学校の男子校約五〇校の、校長で組織する校長協会の会員校約二百校の通称である〔註1〕

2　フリーの意味について

フリー・スクール（Free School）のフリー（自由な）とは、何からの自由か、この論議は一九世紀後半から二〇世紀初頭まで続いた。先づ、

1　中世の聖堂、修道院学校のような、外的支配からの、自由とするもの。

2　それらの学校は特定の階級、教区の住民に限られ、地域外の者は外来者（フォリナー）とされた。これらの制限からの自由とするもの、最後に

3　フリー・スクールが基本財産をもち、貧乏な子供、住民の一定数を無料で教育している事実から、1、2、の自由の意も含む、無月謝（父母負担からの自由）学校の意味、に落ちついた。この意味の最も早い文献としてオックスフォド辞典（フリー・スクールの項）に、

「一四八八年、ストックポート（チェシア）の町にグラマー・スクールを建設するに当り、創立者エドマンド・ショウ〔註1〕の意図は一僧侶にグラマー・スクールを経営させ、月謝を徴収することなく教授する」

例を最初にあげ、セント・ポールズ校は第五例として引用している。

3　ウィンチェスター・カレッジ創立前の

ウィンチェスターの教育

ウィンチェスターは中世を通じ重要な町で、ウェセックス王がイングランド王となるやその首都となった。僧正座が置かれたのが六七八年、第一代僧王はヘッダ（七〇五死）であった。A・Fリーチ「ウィンチェスター・カレッジの歴史」〔註1〕によると、修道院聖堂には学校が付属し、ベネディクト派修道院〔註2〕の方法は、

第一に、修道院の後継者たる見習僧のため、聖堂の回廊で年配の修道僧が、学問を伝授し、同派の規則を教えた。（私的な教育施設（プライベート））

第二に、聖堂では孤児や貧乏な子供を、施物係の邸に収容して合唱隊の養成に当った。後になると、場所を聖堂付属の施物所礼拝堂、聖母礼拝堂に移した。ここの文法教師はも早や修道僧ではなく、世俗の教師であった。

第三に、第二の事業は拡大され、聖堂から全く離れ、経費も教師も聖堂と関係がなくなり、教師はただ僧正の免許〔註3〕を受けるだけとなった。（これは門戸を開放（パブリック）した学校である）

ウィンチェスターに僧正座がおかれた頃、もう第三の学校があったと推定される。その理由は僧正が回廊に引こもる修道僧を一人も派遣していないからである。

アルフレッド王（八七一―九〇一）の伝記作者は、末子エセルワー

ドを、聖職者の忠告と王の賢明なはからいで、グラマー・スクールに通学させたとあるが、この記録は教会側には何も残っていない。ただ僧正空席の時に限って、教師の任命を僧会が代行するので、そのような特別の記録があるのみだという。

僧会役員の記録（一三一二―一五四〇）に、一三一二年、「青年僧正祭（一二月の聖ニコラス祭に青少年を聖職位に見たて、行なう中世の行事）にビール、三ペンス½」、一三五三年「学校の七名の若者にナイフ、五シリング、一〇ペンス」

穀倉管理人記録には、一三三〇―三七、「教授達、教団員達に、四二―四八シリング」支出し、一四九五年の案内票に、「学校を卒業した教団員二人に一人当り一四シリング、学校に通っている若者三人に一人当り一シリング四ペンス、オックスフォドで勉強している奨学生に二シリング四ペンス」こうして一人前になった修道僧、院外の学校に通学する見習僧、最も将来性ある優秀な者を、オックスフォド、ベネディクト派グロスター・ホール・カレッジ（後のウォセスター・カレッジ）に送って、後継者養成につとめている。

ウィンチェスター・ハイスクール

町の書記や市民が相当の教養をもっていたという記録は、聖クロス施療院（ヘンリー・ド・ブルワ僧正が一一三六年創立）から、法王への請願の記録に、一三七三年二八人の証人が呼ばれた。一四人は聖職者、残り一四人は一般人で、内一一名は、「教養」ありとあるが、これはラテン語を知っていたことを示している。

この施療院は基本財産で運営され、

1　在院者　貧乏人一三名、管理人一名、僧四名、書記一三名、貧乏なグラマー・スクール生徒七名、これは唱歌隊員、全員院内に居住してホールで食事をとる。

2　通院者　ここの行政区、百人組（ハンドレッド）の貧民は公民館（ハンドレッドメンズ・ホール）で食事する。食事は粗末なパン、三クォトの弱いビール、にしん一匹または二匹のさっぱ、または卵二個、吸物またはポリッジ（牛乳でどろどろに煮たオートミール）は、ひしゃくでくむ程の量。

この食事する者の中に、ウィンチェスターの町のハイ・グラマー・スクールから、校長が毎日委託する一三名の貧乏生徒が含まれている。

以上断片的に散在する古記録から、一三九四年以前に、ウィンチェスターにハイ・グラマー・スクールと称する教育機関があったことをリーチは結論づけている。

4　ウィンチェスター・カレッジ

創立者ウィッカムのウィリアムは、一三二四年ウィンチェスターからほんの数哩の貧しい農家に生れた。ウィッカムの領主でウィンチェスター城の管理長官ユーブデールに目をかけられ、ウィンチェスターの聖スイズン学校に通い、フランス語、代数字、論理学、算術を学んだ。当時上流階級の日常語はフランス語で、グラマー・スクールでは一四世紀の八〇年頃までラテン語をフランス語に訳していた。

後にユーブデールの使用人となり、ウィンチェスター城の建築の修理や改造に従事し、二三才の頃、王の宮廷に移った。ウィンザー城築造の監督官となって再建に当り、またテームズ河口のクイーンバラ城を築いた。その堅固なことはイギリス南岸随一という。こうして王の信頼を増していった。王の書記は聖職位はなくとも、主任牧師（レクター）、聖堂（アーミチ）事務局長（ディーコン）、木寺長（ディーン）、或は政府の要人・外交・軍事面に進出している。

一三五六年王領の書記、続いてウィンザー城（王の居城）事務監督

官となり、俸給は一日一シリング、一三六〇年、ロンドンの聖マーティン本寺長、一三六六年ウィンチェスター僧正、翌年は最高の大臣（チャンセラー）となった。現在の総理大臣の地位である。所が一三七六年背任の罪に問われ、地位も財産も失う悲運に陥ったが、リチャード二世の即位で復活した。

彼の財産は莫大なものであった。僧正の報酬は一二九三年ニコラス法王時代の課税額二九七七ポンド、一五三五年三八八五ポンド、二〇倍として年六万ポンドとリードは計算している。（この本の発行一八九九年―池田）。

大聖職者がその財産を慈善事業に投ずるのは慣例になっていた。早くは修道院の創立、一三世紀の半頃からは、牧師養成のため僧会組織教会（Collegiate Church）の建設がはじめられていた。同様の運動が大学でも、学寮（College）の創立となって現われた。二つのカレッジの相違点は前者は教会に奉仕するを第一義とし、後者は学問が第一義である点で、共に基本財産をもつ独立した財団法人団体である点は同じである。

僧侶不足

当時英仏戦争（一三三八年開戦）、引き続いて黒死病（ペスト）がヨーロッパ中に流行した。イギリスには一三四八年に上陸し、翌年中にイングランド、ウエルズに広がった。六一年にも再発し、六二年、六九年と猛威を振い、人口は三分の二に減少したという。〔註1〕

僧侶も凡そ四分の一が死亡し、六一年の再発で三人の僧正が亡くなっている。ウィンチェスターの例をとれば、聖スイズン小修道院の修道僧は、一三四五年六四名であったのに、一三八五年になっても四六名であった。サスターン収容所は、定員男女二一名であったのに、一三五二年にはたった六名、五六年に一六名となっている。この僧侶不足を補充することが、最も急務でなくてはならぬ。

ウィッカムが、故郷の貧乏な人々のためにグラマー・スクールを、さらにオックスフォド大学内にカレッジを、彼の私財で建設する決心をしたのは、ウィンチェスター僧正として故郷に錦を飾った直後であったろう。一三六九年にはオックスフォドに土地購入のため、バッキンガムのジョン外三人を代理人として雇い入れている。

こうして創立準備がすすめられ、相談相手はマートン・カレッジの教授達であった。土地の購入と基本財産の設定、王の勅許状、法王の教書の申請、建築の監督などの事務があった。

法王ウルバン六世の教書は一三七八年、王の認可は一三七九年、オックスフォドのニュー・カレッジの礎石が打込まれたのが一三八〇年、ウィンチェスター・カレッジのためには、聖スイズンの修道院と尼僧院の土地を買い取り、礎石が打込まれたのが一三八八年、開校は一三九四年のことであった。

彼の学校創立の目的は、一三八二年一〇月署名の、基本財産設定証書の序文に続いて、

「最近七〇名の貧乏な奨学生（スカラー）と学者が、神学、教会法、市民法、芸術を研究することが出来るよう、オックスフォド大学内に永久的なカレッジを創立し、基本財産を設定した。……われらの生活上重要なものとして経験が教える所によると、ラテン語文法は最も基礎的なもので、あらゆる学芸の源流であって、それなくしては何も知ることは出来ず、如何なる目的も達することは出来ない、さらに学問から得た知識で正義が培われ、人間生活の繁栄が増加する。……これから後は、向学心に燃える貧乏な学生が、心配なく勉強を続け、ラテン語に堪能になることが出来るでろう。……」

彼は神学士クランリーのトマスを校長に指名し、奨学生の入学を許

可した。学校規則は一四〇〇年改訂されたものが残っている。カレッジの構成員として、

校長（ワオーデン）、教頭（ヘッドマスター）、評議員（フェロー）一〇名、僧三名（チャプレン）、助教師（アッシャー）一名、奨学生（スカラー）七〇名、書記三名、合唱隊員一六名の計一〇五名、外に使用人は門番、パン焼人、ビール醸造人、料理人その他多数の大世帯であった。ニュー・カレッジの奨学生七〇名、これは当時オックスフォドの全学生数と同数で、設定された基本財産は、他の全カレッジの財産総額を超えるものであった。

ウィンチェスターのグラマー・スクールを、ニュー・カレッジに直結する方法も、ウィッカムが初めて試みた新機軸であった。

次の特徴は、二つの学校を切り離し、財産も別に独立さしたことである。他の僧会組織教会は大学生のために創立され、付属のグラマー・スクールは付属物であり、時には邪魔物扱いされる。ウィンチェスターでは付属品ではなく、生徒が本体である。「校長と奨学生と学者」の学問を目的とする、独立した法人団体である。「ここに初めて、学校が学校のために、学校中心の、学校自体で管理する、至高にして独立した、財団法人組織の団体として設定されたのである。〔註2〕

両カレッジは何れを重しとするものではなく、共通の目的はあらゆる学問の母である聖書の趣旨を広めるよう、立派な教育を受けた牧師の養成にあった。それ故教授は両校共通で、奨学生の決定は、ニュー・カレッジから二人の教授がウィンチェスターに赴き、ウィンチェスターの校長と教授と合議の上、ニュー・カレッジへの奨学生はウィンチェスターに在学する者から選び、ウィンチェスターには、一般の希望者から選定した。

生　徒

入学許可の条件としては、良い性格で、健康な、紳士的な習性をもち、読むこと、よく歌えること、ドナーツ文法書（エリウス・ドナーツ（アルス・ミノール）は四世紀ローマの教師、波の小読本は八篇からなる教義問答集で、中世時代ラテン語初歩として有名であった）〔註3〕を学習していて、学生として最適の状態にある、貧困な奨学たることであった。貧困とは年収五マーク（一マークは一三シリング四ペンス）以下であること、これはそう低い収入ではない。

年令は八才から一二才の間とするが、一六才であっても一八才の者よりラテン文法に長じていれば許される。学校に留まり得る年令は最高一八才である。

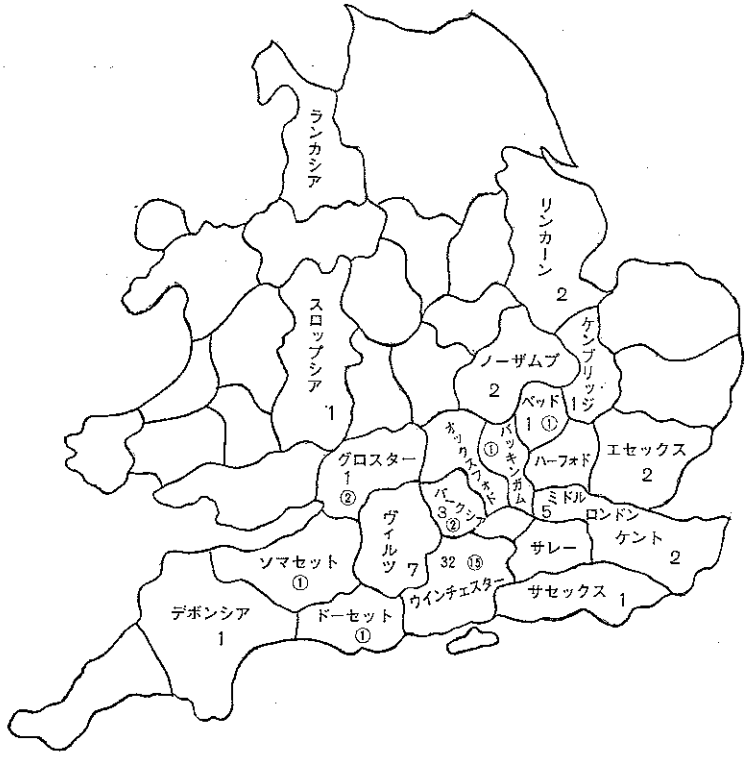
選定に当っては出身地も考慮された。

1　カレッジに近い住民
2　ウィンチェスター僧正区の住民
3　次の地方順、オックスフォド、バークシア、ウィルフ、ソマセット、エシックス。
4　イギリス国内の住民

入学生名簿の最古のものは一三九三年の六五名、翌年の二三名、その出身地は別図の通りである。最も遠い者はリンカーンシア、九七年の名簿にはランカシアの名家ホービーの名が見られる。如何に国家的規模のものであったか、如何に学問に飢えていたか、実に貴重な地図である。（新校舎落成前に仮校舎に一部生徒が入学していたことが推定される）

教育課程

ドナーツの文法書の後でどのような本が使用されたか。ニュー・カレッジの教授達が、神学、哲学、教会法、市民法などに使用したものから推定する所では、年代記その他の文法書と思われる。後者には千年もの間標準的文法とされた、プリシアンの大、小の本が含まれてい



ウインチエスターカレッジ

一三九三年入学生（六五名）分布図

○の数は一三九四年（二三名）のもの

た。彼は五百年頃コンスタンチノープルの教師であった。その外賛美歌、旧約の詩篇は勿論、信条の暗記、訳解、動詞の変化、言葉の語尾変化などに習熟せねばならない。

授業のすすめ方は、七〇名を三五名宛に切半し、上級をプリーフェクト、下級をインフェリオールと呼び、上級を教頭（ヘッド・マスター）、下級を助教師（アッシア）が教えた。三五名という数は一八六〇年代までは、多過ぎるとは考えられなかった数字である、とリーチは書き添えている。

カレッジの内部生活、家具類、衣服、食事や、競技、娯楽については殆んどわかっていない。それらを会計簿や集会場記録から推定するだけである。ある者はまことしやかに、藁の上に休み、寝台も敷布もなかったといっているが、カービィ氏は、カレッジ年代記で、第一年目、六四の寝台が、一台につき一シリングで購入されていることを証している。一シリングは現在の一ポンドに相当し、これは鉄製の寝台を手に入れることができる金額である。一三九七―九年、学校規則の除外例規定によって、創立者の親戚の二人の子供が入学しているが、その費用がカレッジ費で支払われている。それによると、敷布シャツ、半ずぼん用リンネル、一二エル（一エルは四五インチ）その加工賃七シリング一一・五ペンス、寝台用の厚地の布、五エルが二三シリング、〇・五ペンスその他の記録がある。〔註4〕親戚の子供だからといって特別扱いであったのではない。

基本財産

カービィの年代記によると、最初の会計簿に記載されている、一三九四―五年度収入は、五一二ポンド、一一シリング一ペンス、このうち二〇五ポンドは年度内未収金である。これの主なるものは、最も早く一三七一年ウィッカムがウィンザーに求めた土地、その後あちらこちらの土地を買い求めて、死後遺産としてカレッジに寄付したもので

ある。

一三九八―九年　収入　四二〇ポンド、四シリング二ペンス
　　支出　四二一　一一　五
一四〇六―七年　収入　四五四
　　支出　四八四

一五三五年の収入は七一九ポンドに達した。後から寄付された財産、余剰金で買い足した財産からの収入増のためである。

最初の最も大きなものは、一四一三年、外国小修道院の土地購入で、年五二マーク（五四ポンド一二シリング）の収入予定が、一五三五年、三一ポンド、一五四八年、八一ポンドに増加した。

大小の寄付が続いた。命日寄付である。

一四五〇年、サーバン校長は礼拝堂と年収八〇ポンドの土地を寄付。

一五四八年の礼拝堂条例によって全ての命日寄付は没収の運命に会ったが、カレッジ、ウィンチェスター、イートンは除外された。

自費生

創立当初から奨学生以外に、協力者であった有力者の子弟を、一〇名まで自費生（宿泊費食費のみ負担、授業料は徴収しない）として許可していた。一三九六―七年の校長記録に、「ユープデルの二人の子供」がいる。所が一四一二年僧正の命令書は、自費生が不当に入学を許可されていることを指摘している。奨学生、自費生（Commoner）一〇名、この外に定員外自費生（Out-Commoner）を八〇名から一〇〇名入学させていたのである。

これらの自費生はカレッジ外に宿泊していたが、カレッジ内に宿泊するようになったのは、一六〇七年以後のことである。〔註5〕

一八六一年の概況〔註6〕

1 基本財産（一八六〇年の分）

収入　土地家屋賃貸料六、四七一ポンド、九シリング、一ペンス
　　借地契約上納金　七、二〇〇、〇、〇
　　その他木材、利子など。
　　合計　一七、六二二　五、五

これはハンプシァを含む九州に散在する二四二件に及ぶ財産と、公債からの収入である。

支出

食料費	二、七三四、ポンド　一四、二
校長外人件費	九、八〇八、　一七、一〇
営繕費	一、四〇二　八、六
その他、土地購入費（三三四ポンドを含む）	
合計	二〇、〇九八、　六、七

支出超過約二、四七六ポンドは前年迄の繰越金から支払っている。

このうち奨学生七〇名のために支払う金額

教頭へ	三〇〇ポンド　〇シリング
次席教師へ	二二〇、　一四
数学教師へ	二一〇、　〇
カレッジ係指導教師へ	二〇〇、　〇
自然科学教師へ	一〇五、　〇
合計	一、〇三五、　一四

従って奨学生の父母負担は（年間）

仏語教師へ	一ポンド一〇シリング
独語を学ぶ者は、教師へ	二ギニー
少年指導員（ボーイ・テューター）へ	二ギニー

少年指導員とは最上級生に下級生を割当て、学科の個人指導に当らせた、この学校独特の方法をとっていた。（報告書、第二巻一七七―一九〇頁）

2　生徒数（一八六一、一二、現在）

一九七名（奨学生六八、自費生一二九）

学級編成表

6　年　級	41	奨29 自12
5 年 上 級	34	奨11 自23
5年中級(1)	31	奨12 自19
5年中級(2)	27	奨8 自19
5 年 下 級	27	奨8 自19
4 年 上 級	27	
4 年 下 級	10	
計	197	

（報告書第二巻三四四―六頁）

自費生の数は

一七三〇年　八七
一七五〇　一〇
一八四六　一四八
一八五八　九〇
一八六三　一六〇（報告書、第一巻、一三九頁）

3　特別奨学生

ウィンチェスター校卒業生に、ニュー・カレッジの奨学生たる地位を優先的に与える制度は、一八五八年オックスフォド大学委員会規定で、人員が改正された。

(A)　特別研究員　三〇名

大学卒業後も奨学金を受けて研究を続けるもの、これは最近二年間に九つの空席ができている。（報告書、第一巻、一四九頁）

(B)　奨学生　三〇名

ニュー・カレッジの奨学生は五年間支給。それ故年々六つの空席ができる。ウィンチェスター校からの進学状況は、後の学長報告を参照されたい。

以上の外の奨学金としては、

(C)　ベッドミンスター奨学金、年四六八ポンド
（これは一万五千ポンド余の整理公債からの収入である）

(D)　退職者寄付の奨学金、年四百ポンド
（一七五〇年ドブソン博士などが創設）

(E)　メアズ・アシュビー教区税による奨学金、年五〇ポンド、四年支給

奨学生の選定は校長一任（報告書、第二巻一三七―一五一頁）

以上の奨学金による奨学生は、計四八名に達し、これは全員大学に在学している。

4　奨学生の実態

(A)　大学入学生

一八六二年夏ウィンチェスター校卒業生の数、三一名
内、就職　一八名
大学　一三名

この年は全員オックスフォドの各カレッジへ入学している。

ニュー・カレッジに在学する奨学生の実情は、一八六三年四月七日付、学長から調査委員会への報告書によると、

奨学生　三〇名

これらの奨学生は、年々ウィンチェスター校出身者でみたさるべき者である。

みたされない場合は、公開競争試験によるものとする。

現在在学している一八名の奨学生は

一八五九年　五名
一八六〇　一
一八六一　六
一八六二　六

この年の六名のうち、ウィンチェスターからの入学生は四名のみ、他の二名は公開試験によって、ラグビー校、オスウェストリー校（シュロップシァ西北隅にある）から入学している。（報告書第二巻三三頁）

(B)　ウィンチェスター校出身者で大学在学中の者、六二名（一八六一年ミカエルマス（秋）学期）在学カレッジ名及在学生数

オックスフォド
ニュー・カレッジ　一四名
エクゼター　七
コープス　五
クライスト　五
バリオル　四
オリエル　四

の如く散在し、一五カレッジに、計六〇名ケンブリッジには

トリニティ・カレッジ、二名のみ。（報告書、第二巻、三一―三二頁）

以上六二名中、奨学金受領者四八名として七七％がウィンテェスター校奨学金の恩恵を受け、他のカレッジ自体の奨学生となっている者の数を合算すれば、この比率はさらに大きくなる。能力の高い者は特別研究員として残り得る可能性も強く、無月謝学校の精神が如何に徹底したものであるか、これからも知ることができる。

5　一六世紀前のロンドンの教育

セントポールズ校の創立（一五〇九年）前までの、ロンドンの教育について一瞥しておきたい。

商業の発展につれ次第に強大となってきたロンドンの商人達は、既に早く一二一五年、ジョン王の勅許状で、市長を選ぶ権利を獲得していた。

ロンドンは全国各地から職を求め、学問を求めて流れこむ若者達で、人口は次第に増加した。ロンドンの人口は「一五六〇年代にはまだ中世的色彩の強い町で、人口はわずかに九万そこそこである。しかるに一六六〇年代になるとこれが四六万の人口になる」（増田四郎、都市、一五七頁）別書〔註1〕によると、一五六三年から一六二四年に、三〇万以上となっている。

市民達は徐々に、市民生活に関係深い事務処理能力を高めてゆく。立法・司法・行政については勿論のこと、市場の管理、商業上の事務処理、さらに慈善施設の拡張、子供の教育施設など、事業をすすめる体制を整える。一五世紀は富裕な市民達の勢力が益々強大になり、法人団体である各種の組合は相協力して団結を固め、その富を蓄積していった。

一四世紀の終り頃、ロンドンの教育を独占していた教会は、

1　セント・ポール大会堂
2　セント・メアリ・ル・ボー教会
3　セント・マーティン・ル・グランド教会〔註2〕

であった。また礼拝堂（礼拝堂付牧師が子供達を教えていた）は、

市内に一四世紀までに二八〇、一四〇三年以後一三三建設され、このうち二〇〇は、一五四〇年代まで存続していた。

所が一三九三年、教会は多数の教師を、無免許で教授しているかどで、教会法廷に召喚するという事件がおこった。これに対し、無免許教師達は市長法廷に、「訴訟進行停止令状」を請求し、学校持続の権利をあくまで保持する意向で対抗したのである。

この正面からの挑戦は、カンタベリー大僧正、ロンドン僧正、三教会の高僧から、国王への請願という、最高レベルの抗争に発展していった。この事件の記録は残されていない。

この直後の一四一〇年、グロスター・グラマースクール（修道院に付属し、勅許状によって正式に許可された学校）のジョン・ハムリン校長は、校区内の無免許教師トーマス・モアを相手どり、民事訴訟裁判所に、損害賠償請求の訴えを提出した。その理由は、競争者のために授業料を、三ケ月毎に三シリング四ペンスから二シリングであるのを、一シリングに引下げざるを得なかったというのである。裁判官は驚きを面に現わして、若い人達を教え、人々のために高潔な慈善行為を働いた人々を、われらの普通法で罰することは出来ない、と判決を下した。〔註3〕

従来農奴はその子を学校に通学させるためには、領主の承諾を要した。〔註4〕一四〇六年の労働者条例はこの制限を廃止した。この法では、その子を徒弟に出すためには、年二〇シリング以上の収入あることを条件とした。所がロンドンはこの条件を巧みに外した。ペストによる労働者確保の法も、ロンドンの繁栄には勝てなかった。

教会が古い権利を維持しょうとしているロンドンに、一四四〇年代に二校が加わることになる。第四はセント・アンソニー慈善施設付属の学校で、一四四五年開設された。ここでは学力不十分な教師が無免許で教えていたので、教会は教授中止を要求している。

第五はヘンリー六世創立のイートン校である。この学校はウィンチェスターを範として創立された。（詳細は別の機会に述べる）。教師の陣容に申し分はないが、生徒募集に心配がある。イートン校教育の邪魔をしないよう、半径一〇哩地域内に教育独占権を公告し、学校保護に当っている。〔註5〕

この頃教育上の慈善行為が続々なされている。絹織物商で三度ロンドン市長であったリチャード・ホィティントンは、市庁舎付属図書館と僧侶養成学校建設資金を遺し、彼の遺言執行人で、市役所事務局長ジョン・カーペンターは、市庁舎付属礼拝堂付、唱歌隊員養成を目的として、四人の貧乏な子供の養育と教育のため、家屋敷その他の財産を市に寄付した。（この項は、シティ・オブ・ロンドン・スクールに再出）

効果的な教育の要求はいよいよ高まってきた。飾り職組合（Goldsmiths' Company，一八世紀までは往々金融業を兼ねたという）は一四七八年、読み書きの出来ない徒弟は採用しないという規定を設け、さらに高い規定は、一四九七年の公証人組合のそれである。徒弟達は学問が足らないために、その文字や文章に誤りが多い。親方はそんな徒弟は採用しないよう、採用に当っては組合の事務局長に面接の上、試験を受けることを規定した。〔註6〕

こうして一六世紀を迎える早々、教会から離れた、俗人の管理する、貧乏人のための学校が、創立者の強い信念と強力な財政的支持のもとに、創立される時代を迎える。

6　セントポールズ・スクール

イギリスでも最も古く、豊かな基本財産に恵まれた、財団法人組織

のセントポールズ・スクールは、また最も早い「無月謝学校（フリー・スクール）」であって、イギリスが生んだ偉大な学者、知性に富むキリスト教徒、ジョン・コレットが、当時宗教と学問が混迷の中にさまよっていた時代に、純粋な主張を貫こうとする願いをこめて、創立した学校である。すでに述べたウィンチェスターはじめ、当時の学校が教会に非常に接近していた時代に、この学校は他の束縛から離れた、ただ高貴な教育のためのみに捧げられた学校、多彩な人々の心がここに結集され、そして美事に花開いた学校としても、意義深いものがある。

ジョン・コレット

イギリスのルネッサンス期思想家の代表として、オックスフォードのウィリアム・グロシン（一四四六―一五一九）、ジョン・コレット（一四六六―一五一九）、この二人に師事したトーマス・モア（一四七八―一五三五）、さらに大陸からイギリスに渡ってきて、これらの人々と交わり、相互に影響しあったロッテルダムのエラスムス（一四六六―一五三六）がいる。学問の復活について、彼等が残した功績は非常に大きく、その中でもエラスムスが最も高い存在であったことは周知の通りである。

コレットは、裕福な市民で二度もロンドン市長に選ばれたヘンリーを父とし、二二人兄弟（男女各一一人）の長男として生れ、後に父の遺産を継いだ。母は九〇才の長寿を保ち、一番長生きして、後年エラスムスとの対話を非常に喜こんだという。コレットは多分セント・アンソニー校で教育を受けたのであろう。

一四八三年オックスフォードのモードリン・カレッジに学び、学位を受けて後、教区牧師をつとめ、後フランス、イタリーに旅行し、パリでエラスムスに会い、イタリーでグロシンに会っている。教会法、市民法を学び、ギリシア時代教父達の遺稿を根本的に研究することをはじめ、フィレンツェではプラトーン主義の影響を強く受けた。

帰国後、オックスフォードで神学を講じ、後転じて、セントポール寺院の本寺長（ディーン）となった。彼はキリスト教を深く究めるに従って、現実の教会が腐敗、堕落の極に達していることを嘆いた。例えば、木材の価格を釣り上げるためには、ちょっとした異説をたて、教会分離を計画すればよい。うわさだけで、本材価格は一躍はね上るのである。こんなことが平気で行なわれていた。人々の心を、善良で純粋なものにするためには、何をせねばならないか、これが彼の心を占めた最も大きな課題であった。これは、マルティン・ルターの爆弾宣言と相通ずるものである。彼は

第一に、偶像崇拝に強く反発した。

第二に、キリストがポーロに「わが小羊をかいなさい」〔註1〕とすすめられた言葉には、現世的な意味はないという考え方に、反発した。

第三に、僧侶達の、説教という名の熱のない、平板な愚かしい話しに反発した。

彼の終極の目的は、聖ポーロの書翰の精神を汲みとれるよう、人々の心の眼を開かせることにあった。

父の死（一五〇五年）後莫大な遺産を受け継ぐことになった彼は、この財を永遠に残し、人々の精神を覚醒するようなグラマー・スクールを、ロンドンに創立することを決意し、創立計画をすすめた。

一五〇九年、敷地をセント・ポール寺院の東側に決定し、校舎の建設にとりかかり、学校規則の制定、校長、教師の選定、学校基本財産の設定などの仕事をすすめた。建物は三年後完成、建設費用は四、五〇〇ポンドに達したという。

管理委員会

管理委員の中には一人の僧正も、一人の牧師も入っていない。彼の父が有力メンバーであった、歴史も古い、基礎も強固な、絹織物商組合（Mercers' Company）の組合長、事務局長、役員をもって管理委員会を構成し、学校の運営・財産の管理に当ってもらうことにした。エラスムスは、名声の高いロンドン市民を、委員に選び、学校の運営を委任したコレットの高い見識を、激賞している。

管理移管についての効許状が発せられたのは、一五一一年七月一二日のことである。

彼の見解は、あらゆる施設は、基礎が強固であると同時に、時代の進展に伴なって、発展し得る柔軟性を備えていなくてはならぬ。基礎が弱ければ早く衰微し、柔軟性がなければいつかは凝固し、やがては障害ともなり兼ねない。国民生活の進歩に伴い、時代に敏感な、商業組合に管理を委ねることが、最も妥当である、これが彼の結論であった。

学校規則

序

ヘンリー・コレットの子、セント・ポール寺院の本寺長、ジョン・コレットは、われらが王の一五一二年、子供達によい躾と学問を学ばせる目的をもって、セントポール寺院の境内に、一五三名〔註2〕を無料で教育する学校を建設した。校長、教頭、礼拝堂付牧師は充分な報酬を用意して任命し、学校の保護者、守護者、管理者、支配者は、ロンドンの最も誠実な絹織物商組合とする……。

校　長

……学校では校長を第一とする。校長は教育方針でも、学問、教授においても、学校全体を指導するものとする。校長は、絹織物商組合の、組合長と役員によって選任される。校長は健康な身体の所有者で、公正で徳望あり、ラテン文学に精通していること、出来得るならばギリシア語にも精通している学者が望ましい。既婚、未婚は問わない。学校の任務の邪魔となる特定の教会の聖務、寺禄がなければ、聖職位（プリースト）をもつ人でもよい。

組合の役員は学校で、文学に通じ学問ある人を選任する協議のため集会をもち、校長の選任が終ったならば、次に、

「われらは貴殿を、この学校の子供達に、よい学問だけではなく、よい躾をすること、校内に常に居住することを確認して、校長に選任する。

貴殿は毎年キャンドルマス（二月二日）に組合役員集合して、生徒に試験することを許可し、貴殿の仕事が好ましい状態で進行しているならば、仕事を継続すべきである。そうではなく、理由のある警告が発せられたならば、貴殿は離任に同意してもらいたい。さらに貴殿自ら離任を決意される場合には、何時でも宜しいが、後任者選任の都合上、一二ケ月前に通告されるようお願いする。……校長の報酬は週一マークとする。……（一マークは一三シリング四ペンス）

教頭（略）

礼拝堂付牧師（略）

生徒

生徒は、学校で用意されている座席数一五三名まで、あらゆる国民、あらゆる地方の区別なく教えらるべきである。……しかし入学に当っては、教義問答（カテキズム）がいえること、完全に読んだり書いたり出来なければ、決して入学させてはならない。

生徒は入学署名に当って、一度だけ四ペンス納入すること、四ペンスも出せない貧乏な生徒は、校舎、座席の清掃をせねばならない。生

徒は夏冬共に、朝七時に登校し、一一時まで在校して帰宅、午後一時に再び登校し、五時に終了。（報告書、第二巻、五八一―三頁）

第一代校長ウィリアム・リリー（一四六八―一五二二）

リリーはオックスフォド卒業後、エルサレム巡礼に出掛け、帰りにロードス島（コンスタンチノーブル陥落前多数の古文書がここに避難させてあった）に五年滞在し、ここでギリシァの古文書を学んだ。さらにローマに学び、ここでコレットに会っている。

一五〇九年帰国、ロンドンでギリシァ語を教えた。公にギリシァ語を教えたのは彼が最初であったという。

彼はコレットに乞われて、第一代校長として努力したが、一五二二年の疫病で惜しくも没している。彼のラテン語文法書は、後世まで永く使用された。〔註3〕

一八六二年の概況

豊富な学校財産と、堅実な管理のもとに運営された学校は、三百五十年後のクラレンドン報告書によると、

1、基本財産　（一八六〇年）

収　入　九、五四九ポンド　一六シリング　五ペンス二分の一、

内　訳　家屋五二五件（家賃は二〇年契約、最高二五〇ポンド、最低一ポンド）、土地賃貸料、公債利子収入等。

支　出　報　酬　二、三七〇ポンド

（校長九〇〇ポンド教頭四〇〇ポンド外計七名分）

故ロバート氏夫人への年金　一四八ポンド

特別奨学生一三名分（前期）　四二五

同　一四名分（後期）　四五〇

三分利公債購入費　二、五〇〇

其の他

合　計　九、九一〇ポンド　四シリング　一一ペンス

この年は支出超過、余剰金積立から支払われている。余剰金の使途については、学校規則で組合の収入としてよいことになっているが、組合のためには一文も支払われていない。

2、生徒数　一五三名、全員無料（ただし入学に際し門番に一シリングだけ納入することになっている。自費生の入学も認めず、創立のまゝの数を保っている。）

学級編成

八年級一八名、七年級一六名、校長担当

六年級一五名、五年級一九名、教頭担当

四年級二〇名、三年級二一名、第三教師担当

二年級一八名、一年級一九名、補助教師担当

欠員七名

入学の条件、九才以上で英語の読み書き、間違いなく綴ること、一九才以後は在学出来ない。

卒業生　一八六二年夏卒業した者　一七名、大学に入学した者、オックスフォード二名、ケンブリッジ三名、計五名。

当時大学に在学中の者、計二八名、内訳オックスフォード一一名、ケンブリッジ一七名（報告書第二巻三一―二頁）

3、特別奨学生

試験の結果で選定する。

一二〇、一〇〇、八〇、五〇ポンド、各一名、四年間支給

三〇ポンド一名七年間支給

一〇ポンド六名、一三ポンド五名、計一六名

この数から学校の奨学金を受ける者は、在学生の約五七％に当たることがわかる。

（報告書第一巻一八七―二〇一頁、第二巻二三一―二四三頁）

7　クライスト・ホスピタル

産業が興り、商工業に従事する人々の生活が豊かになる一方では、火災、水難、病気、事故等の不慮の災害の為に、社会の流れの底に取り残される人々が予想外に多くなり、これが社会不安の原因ともなる。

「青い上衣の学校」として、こゝで養育される子供達の着衣からよく知られている、クライスト・ホスピタルは、もともとロンドンの五つの王立慈善施設（ホスピタル）の一つである。五施設とはセント・バーソロミュー（一一二三年創設）、ベスレヘム（一二四七年創設）、後のクライスト、ブライドウェル、セント・トーマスの三つは、エドワード六世（一五四七―五三在位）の創立である。王は宗教改革を断行したヘンリー八世の後を継ぎ、改革後の社会不安の渦中にあったが、たまたまウエストミンスター寺院で、リドレー僧正の「慈悲」についての説教をきゝ、不幸な人々の救済に乗り出した。

1、父のない幼い孤児のための施設

2、不具や病気のため貧乏となった者の施設

3、怠けて貧乏になった者のための施設

クライスト・ホスピタルは第一の目的の為の施設である。ホスピタル（hospital）とは、本来病人、貧困者、身寄りのない老人、旅人の世話をする慈善施設の意味で、子供がおれば養育と教育にも当る施設である。

この目的のために、既に没収されている修道院の建物と敷地をあてることにした。セント・トーマスは第二の目的に、前の宮殿であったブライドウェルは第三の目的に使用された。

勅許状には「施設が創立され開設されたならば、イギリス王エドワード六世の、クライスト、ブライドウェル、使徒トマスのホスピタルと呼ぶこと、ロンドン市長と市民、及びその後継者達は、この施設の管理者と呼ばれる」〔註1〕こと、維持のための財産としては、既に解散したサヴォイ（修道院）施設の土地・建物からの収益年四五〇ポンドと、別に死後遺産として年四千マークの価値ある土地を獲得する許可を与えることを約束し、この慈善施設を財団法人とする勅許状に署名した。一五五三年のことで、王はこの一ケ月後に没している。

市民は古い修道院を、四百名収容を目標に大馬力で改装し、調度品を運び入れ、市民からの寄付も受け入れ、貧乏で不幸な孤児三四〇名を収容して開所した。

三施設は目的は異なっているが、資金源は一つであった。勅許状にある領地や屋敷がいつ王の手を離れ、施設の所有となったのか、ロンド市の管理に入ったのはいつか、三施設がいつ別の団体になったのか、今となってはその時期を確かめることは出来そうもない。

施設がその目的を効果的に運営するには、管理委員会を別に開いたがよい。財産も別にせねばならぬが、寄贈者の意向も尊重せねばならぬ。

クライスト・ホスピタルへの第一号寄付者として、ロンドン史家ストーは、次のカステラーの逸話を記している。

靴屋のリチャード・カステラーは、ウエストミンスターに住み、腕一本でたゝきあげた。夏も冬も朝は四時に起き、もっぱらウエストミンスターの雄鶏の異名をとった。よく働いたので神の加護も厚く、やがて土地を買い求め、自分の家屋敷その他の収入は、年四四ポンドの価値にまで達した。彼には子供がいなかったので、妻と相談の上、所

有する土地その他の財産を全部、クライスト、ホスピタルに寄付したのである。〔註2〕これは当然この施設に帰属さすべき財産であるといわねばならぬ。

クライスト・ホスピタル創立前、ロンドン市内のグラマー・スクール四校は、みな僧会組織教会に付設されたもので、ロンドン城壁内の教育施設としては十分でない。最も新しいセントポールズ校は、学校の評判は至ってよいが、生徒数は僅かに一五三名に制限されている。それ故新しい学校が創立されたことを、市民達は心から迎えたのである。

ストーが語る所によると、開校された直後のクリスマスに、子供達は市中行進のため、セント・ローレンス街からセントポール寺院まで並んだ。子供達のその時の服装は、小豆色の木綿であった。しかし次のイースターに、セント・メアリー施設に説教聞きに出席した時の服装は、すっかり異なっていた。足首まで届く長く青い上衣は、皮ひもが腰のあたりを締め、黄色い下衣、それに黄色い長靴下をはいていた。

学校には各方面から寄付が寄せられ、建物の改善、子供達に必要な施設の改善が加えられた。

一般からの援助だけに満足しない管理委員会は、施設の維持費獲得に積極的に乗りだした。

毛織物検査科収益金

リチャード二世時代（一三七七―九九年在位）、ロンドン市議会条例は、ロンドンで売りに出される全ての毛織物は、厳重な品質検査のため、ブラックウェル・ホールの市場に、一時付託するよう命じていた。クライスト・ホスピタル創立後は、この一切の仕事をこの施設で引き受け、それから上る収益は全部この学校維持費に投入するよう、管理委員会は決定した。

科料収入

市議会条例は一五五四年、セント・ポール聖堂を汚すおそれのあるいかがわしい興業に、重い罰金を課した。同じ趣旨から市民のための娯楽興行に、入場料の制限を設けた。勿論このような措置は、プロテスタントの禁欲的な精神からでたものである。両方の場合とも、科料の半額は、クライストホスピタルの維持費として引き渡すべきことを命じている。

献金箱

学校維持費を集める献金箱が、毎月一回、市長と参事会の命で、あらゆる市の施設内に設けられ、市民の慈善心に訴えるようになった。「貧しい、青い上衣の子供達が、心安らかに寝とまりし、教育を受けている、クライスト・ホスピタルのために」と書かれた献金箱は、一八三四年も回廊に備えられていたという。〔註3〕

入所児童

学校創立当時の数年間、入所の条件として

1、子供は四才以上であること。

2、父母が正式な結婚をしていること。

3、父が自由市民であって生活に困っている者であることを、市参事会員又はその代理者の証明、六人以上の住民の保証があること、が必要であった。

教育は、男子であれば読み、書き、計算することを教える。こゝでの養育期間は、原則として一五才までゝある。しかし優秀であって、将来学問によって一人立ち出来る見込みのある者については、大学入学準備がすゝめられる。

一五才に達し、徒弟としてこの施設を出る時には、会計係が他の委員とよく相談の上、実直でしっかりした仕事の出来る、有能な職人に

仕込み得る実力のある親方に、依頼される。

収容児童に、自ら二つの階級が出来るようになってきた。

1、五才以上で、自由市民の子供であって慈善の対象となる者　二五〇名

2、緊急止むを得ず収容した者で、年令の低い者　一五〇名

これらは古い記録にはっきりしている。一五六六年、これらの子供は合計して、四百名に達していた。

1、宿泊して勉強している者

2、乳を与えて養育している者

この学校の子供達は、この頃になるともう、セント・ポールズ校、セント・アンソニー校の生徒と、殆んど区別出来ない程度になっていた。

負債に苦しむ

一五五三年から一六〇〇年までの四八年間に、管理委員会によって投入された金額は、九、八二八ポンドに達した。

この頃から資金難に陥っている。一五九二年から資金が欠乏し、ロンドン市会に援助を願い出たが、三年かゝっても成功せず、その間支出は才入を予想外に上廻り、一五九七年には、負債額は八百ポンドに達した。事業縮少の止むなきに立ち至った。

こゝに現れた救済の恩人は、メアリ・ラムゼー夫人である。夫人は、前のロンドン市長で、この施設の総裁でもあった、サー・トーマスの寡婦で、一五九六年一月、五つの聖職禄授与権の外に、年収四百ポンドの家、屋敷を寄付したのである。その上一六〇一年七月の遺言補足書では、遺贈の二千ポンドで土地を買い、それから上る年収百ポンドで、ロンドン四教区の貧乏人に一定額を支給すること、クライスト教会で行われる二回の説教に、二ポンドを支払うよう指示してあった。

特別奨学生、特別研究員制度

管理委員会は夫人の篤志美挙を記念するため、年々四〇ポンドを別にして、夫人が深い関係をもつケンブリッジのセント・ピーターズ・カレッジへ、特別奨学生四名、大学卒業後も残って研究を続ける特別研究員二名に、奨学金を支給する制度を設けた。この尊い寄贈者へのホスピタルの義務が、これで終ったのではない。夫人から指示された通り、屋敷からの収入は、今後もこの施設出身者の大学在学中の住居や食費にもあてられ、その恩恵は大変なものであった。学問研究面で「青い上衣」の学校の名声が、ケンブリッジ大学内で高められたのは、一にかゝって夫人の功績によるものである。

ラムゼー夫人がセント・ピーターズ・カレッジと特別な関係があったというのは、夫人がこのカレッジに年々五百ポンドの寄付申出をしていたからである。このカレッジは又ピーターハウス・カレッジとも呼ばれ、ケンブリッジでも最も早い一二八四年の創立である。夫人の申出の条件は、校名を、「ピーターとメアリ」と変更することであった。時の校長はその申出をことわったとあるが、その理由は「ピーターはもう永いこと独身で過してきたので、今さら女性の伴侶を得るには、年をとり過ぎている。」これは冗談であろう、こんな素晴らしい申出をことわるはずがない、と書き添えてある。〔註4〕

児童生徒数の増加

財政状態が改善されたので、慈善事業も拡張された。カムデン氏の時代、こゝで養育され教育される子供は六百名となった。年金受給者で、この養老院の救済を受ける者の数は、一、二四〇名に達した。一六五五年のうちに、教育を受ける子供は、九百名となり、さらに九八〇名、一、一二〇名にふくれ上った。

数学学校の開設

この数年後に、委員の一人サー・ロバート・クレィトンから、施設をさらに有効に使用するようにしたらどうか、という提案があった。これは船員養成を目的とする数学学校の建設である。この提案は有力委員から暖かく迎えられ、ヨーク公（後のジェームズ二世）の好意で勅許状を受け、一六七三年、チャールズ二世の援助のもとに開校される運びとなった。

この学校の基本財産として、王は千ポンドを七年間支出すること、さらに三七〇ポンド一〇シリング追加して、商船の練習生志願者のために、国庫から支出することを約束した。

こゝに特記すべき寄付者はヘンリー・ストーンである。彼は管理委員の一人で、年々五七ポンド六シリング八ペンスを「チャールズ王の学校生徒の、よりよい維持と教育のために」〔註五〕寄付し、また彼の死後遺産の大部分はホスピタルに寄付され、そのうち五〇ポンドは分離して、数学学校支援のためとしてあった。

他の寄付者、サミュエル・トラヴァズは、彼の屋敷の残り大部分をホスピタルに提供し、その利益をあげて海軍士官の子弟の為の、学校創設に役立てゝほしいと申し出た。この学校は数学学校に併設されることになった。

新学校創立後、常に生徒の試験に協力してきたペピーは、会計係に就任し、さらに副総裁に就任して後、学校の改革に乗り出した。

先づ数学学校にいるストーン基金による生徒を分離した。ここの生徒は「王の生徒」と呼ばれ、人数は四〇名に制限してあったのを、人数はそのままにしておいて、ストーン基金による、一二名の生徒を予備生徒とし、四〇名に欠員が生じた時に、この中から補充することにした。

「王の生徒」は他の生徒から全く切り離して教育していた。そこで生徒達は、優越した地位にあるかの如く、錯覚していた傾向があった。年令も二一才で卒業することになっていたので、他の一般の生徒が一五才で就職するのに比較したら、身体は比べものにならない。全く全校の恐怖の的となっていた。

遂に一七七五年、数学学校教師ウィリアム・ウェルズは、二階の若者達の我がまゝ征服に着手し、手のつけられないほど迄になっていた若者達を、服従させることに成功した。この教師は、性淡白、卒直な行動力のある大男で、実際的経験に富んだ船乗りであった。

一六六五年の疫病の猛威は、比較的軽い程度で済んだが、翌年のロンドンの大火では、大損害を受けた。

サー・ロバート・クレィトンは、先に述べた数学学校の恩人であるが、この惨状を見て一六七〇年、学校の復旧計画をすゝめた。仕事はサー・クリストファ・レンと、建設費の半額を負担すると申し出たモリスの協力を得てすゝめられた。所がモリスが急死するという変事があって、全費用がロバートの上にかゝってきた。ロンドン市も、ホスピタル自らの費用負担能力もないので、彼の独力で完成したのである。ロバートの義挙を知ったファーミンは、気前よくやりとげたロバート氏の事蹟を明らかにするため、南門の壁面の若い建設者の像の下に書きとめて、永久に顕彰した。

ロバートの手本に続く者が現れた。一六八〇年、大ホールの荒廃を視察した、時の総裁サー・ジョン・フレデリックは、再建を命じ、五千ポンド以上の支出に同意した。復旧された大ホールは、前のものより大きく堂々たるもので、長さ一三〇呎、巾三〇呎、高さ四四呎、南側に大きなアーチ型の窓がある、実に立派な建築であった。

書写学校（ライティング・スクール）（後の別名英語と商業学校）の開設

この建物が完成すると、管理委員の眼は、他の建物も不十分なこと

に注がれた。

当時小さい者を収容する施設は、ロンドンの北方二〇哩のハーフォードで工事がすゝめられていた。（これは一六八三年完成し、少年の準備学校となり、後に大拡張されて少女学校も開校され、現在に至っている。クライスト・ホスピタルの施設は、二ケ所に分れた。）

一六九四年、サージョン・ムアは、五百名を収容する「書写学校」を自費で建設する決心を固め、レンの監督下にすゝめられ、一六九五年四月、開校されることになった。この学校は副名にもあるように、英語と商業教育を実質上の目的とし、当時の強い要求である書記の養成に当ったのである。

この年の九月二二日、興味ある慈善行為がロンドン市民を驚ろかした。二人の裕福な市民がその死に際し、その遺産を、一人は「一人の青い上衣（ブルー・コート）をつけた青年」に、一人は「一人の青い上衣（ブルー・コート）をつけた少女」に遺贈することになった。若い二人の遺産受取人同志の間に縁談が成立し、二人は公式にロンドン市役所の礼拝堂で挙式ときまり、事件は益々大きく騒ぎたてられた。

青いしゅすの上衣で正装した花嫁は、その学校の二人の少女に導かれ、青いガウンに緑のエプロン（世俗の説教者の服装―O・E・D）をつけた花むこは、二人の少年に導かれ、数名の管理委員が先導して、チープサイドの通りを進むと、その後に数百の生徒達の祝福の行列が続いた。その様は又と見ることも出来ない、楽しい光景であったという。セント・ポール本寺長の手で取り行われた結婚式が終ると、市長は新婚夫婦をホスピタルのパーティに案内した。大ホールには結婚を祝う、正さんが用意されていた。〔註6〕

一七〇五年、サー・フランシス・チャイルドは東の回廊の上に病棟を再建した。一七三〇年更に二つの病棟が建て増された。

一七五四年、ジェムス・アマンドはすばらしい財産を遺贈した。祖父の肖像と、約八千ポンドと評価される屋敷である。会計係は遺産執行人に受領証と、肖像は決して粗末にしないことを誓約した。

校舎改築

一八〇三年、建物を詳細に点検すると痛みがひどく、修理に耐える状態を過ぎていることがわかり、施設の全部を大改築することになった。財産収入を積立てる位では完成出来ないので、広告を出して広く一般の援助を求めることになった。

寄付募集の文書が発せられ、援助第一号はロンドン市千ポンドと発表された。すばらしい寄付申込書が、各会社、個々の管理委員、貴族、地方貴族、各方面から寄せられ、第一石がヨーク公の手で打込まれたのが、一八二五年のことであった。四年後の一八二九年五月、新ホールの落成式が取行われた。

施設を全国民に開放

もともとこの施設は、グラマースクールの役割りと、孤児・貧困児救済が目的で、収容児童は教区からの推せんによって決定していた。五〇年後にはロンドンの自由市民の子供以外は入校させないことに決定された。

一七四五年いくらかゆるめられたものの、市内、市外の区別が全く問われなくなったのは、一八三九年のことである。こうしてパブリック・スクールの名称をもらうことになったが、それでも六〇年間は、上級の慈善学校と見なされていた。

大学にも年々数名が特別奨学生としておくられ、ギリシャ語、ラテン語を学ぶ者は、四〇名から五五名に達していた。

一九世紀に入ると産業界のめざましい発展につれ、国民教育の充実の必要が強く要求された。

このような情勢下で、ホスピタル教育内容改善充実の全体構想を再検討するため、一八五六年、特別委員会が設置された。従来時代の要求に応じて特設され、細分化されたコースの再編成である。

1、大学に奨学生としておくる予備的段階としての学校はそのまゝとする。

2、一五才に達するとすぐ就職する者のため、彼等が将来満足な進歩をとげる機会を提供するよう再編成する。

という方向にまとめられた。

その全容は、

(1) 下級グラマー・スクール

(A)一年級 (B)二年級 (C)三年級

一三才半までに終了した者は、次の

(2) 上級グラマー・スクール

(A)小エラスムス学級〔註7〕(B)大エラスムス学級 (C)グレシァン下級

(D)グレシァン上級

当施設の子供でグレシァン下級、又は学習に秀いでグレシァン下級をねらっている者は、一五才以後の滞在が許される。この学級に在学する者の定員は二五名で、三段階としている。

(a)特別奨学生 五名（確実に大学に進学できる予定者である）

(b)第二グレシァン 八名

(c)グレシァン試補 一二名

グレシァン試補一二名は、第一年の終りに八名に減らされ、さらに一年後五名に減らされる。

(3) ラテン語学校

(A) 五年級 (B) 六年級

ここには(1)から(2)に進めなかった者全員が入学し、一五才まで在学する。

(4) 書写学校（ライティング・スクール）（別名、英語と商業学校）

こゝには「大エラスムス学級以下全員出席する。次の者を除く、数学学校の最初の三学級と算術で優秀な者、授業は週四回、半日。こゝでは英語、作文の書写、英国史、現代地理学。

(5) フランス語学校

この学校に出席する者、上級グラマー・スクール、ラテン語学校、下級グラマ・スクールの上級生、数学学校の最初の三学級、在学生約五百名。

(6) 美術学校（ドローイング・スクール）

フランス語学校に出席する者全員、除く者はグレシァン、グレシァン下級、大エラスムス、数学学校の全員、以上二つの学校で学ぶ者は、週に一時間の授業を二回受ける。

(7) 数学学校 この学校に三コースがある。

(A) 海軍コース 王の奨学生四〇名、ストーン奨学生一二名、時にストック奨学生二名、レーンバラ卿奨学生一名入学することあり、全員海上勤務目的である。

(B) 大学進学コース グレシァン、グレシァン下級生六五名。

(C) 商業コース 大エラスムス、小エラスムスのうち算術が著しく進歩した者、商業学校で算術が最も進んだ者、一〇〇名。

最後の学級生のうち三五名を「トラヴァーズの生徒」という。海軍士官養成に屋敷を提供した寄付者の記念である。

チャールズ二世の勅許状で、一〇名の生徒は年々完全な海員教育のトリニティ・ハウス（ロンドンの水先案内組合）試験を受け、七年間海上勤務訓練を受け、最後の一年は、必要であれば国王のために奉仕する。最近の勅許状補足規定で、多数の生徒は試験通過後、海

軍将校生徒、船長助手又は事務長助手となっている。

以上が一八五六年の再編成の概要である。クライスト・ホスピタルは、創立以来、多くの孤児・見捨てられた子供の、養育という任務を果しながら、多数の善意あふるゝ支援協力によって財政的裏付を得ながら、多様な子供達の能力に応じ、最も高い能力の者には大学の神学、その他の研究準備、実務家となる者の為にはラテン語、フランス語、数学、文書の書写、図工教育等、巾広い教育課程を用意して、時代の要求に応えてきた。

以上がクライスト・ホスポタル三百年間の横顔である。

一八六四年の概況

1、総収入 五六、〇〇〇ポンド

これは全事業の収入で、当施設の各種の事業に分割使用されている。教育費としてはロンドンで九、二三六ポンド、ハーフォドで二、四六二ポンド使用されたものとビショップ（第七表1）は推定している。

2、生徒数

ロンドン　七七五名

ハーフォード　四四九名

教育に要する費用は勿論、全生活費が無料である。

3、特別奨学生

四名、年八〇ポンド四年支給（ケンブリッジへ）

一名、年一〇〇ポンド四年支給

二名、年三〇ポンド四年支給

グレシァン上級から大学に入学した者に、本代二〇ポンド、衣服料一〇ポンド、諸雑費として三〇ポンドを特に支給する。

尚このロンドンの施設は、一九〇二年サレーのホーシャムの新校舎に移転した。

8　チャターハウス

九大パブリック・スクールの中にいるチャターハウス校は、トーマス・サットンが一六〇九年「エセックスのハリングベリーに、救護施設と無月謝のグラマー・スクール創設の法令」（報告書、第一巻一七五頁）と、それをさらにチャターハウスに移してもよいという、ジェムズ一世の勅許状によって創立された学校である。

しかしこれは宗教改革後の再建ともいうべき事業であって、今しばらくこの施設の前史にさかのぼることが必要である。

修道院

一四世紀の半ば過ぎ、ロンドン僧正ラルフ・ストラフォドは、その頃いわゆる「無人の地」を購入して、猛烈悲惨の結果を残した黒死病で死んだ人達の墓地とした。彼は礼拝堂を建設して死者を厚く弔った。

同じ頃バンネレット勲位（騎士の一階級、今はない）をもつウォルター・ド・マニーも同じ目的で、先にあげた土地に接する一三エーカーの広さのある聖バーソロミュ救護施設を購入した。二つの墓地は合併され、ロンドン史家ストウによれば、五万人以上が葬むられているという。〔註1〕

一三七一年、先にのべたマニーはこゝに、カルト派修道院を創立した。これはイギリス内第四番目の修道院であった。

カルト教団の戒律は一〇八〇年、フランスのケルンの一修道僧、聖ブルーノーにはじまり、最初の建物はグルノーブルの山の上に建てら

れ、シャトルーズ修道院と呼ばれ、一九〇三年解散されるまで続いた。これがイギリスに渡り、後にイギリス読みに変化して校名のチャーターハウスとなった。

マニーが創立した修道院は約三〇〇年間特別なこともなく平和に維持されてきたが、一五三四年王の委員の訪問を受けることになった。ヘンリー八世の、教会に対する王権の優位を拒んだ修道僧達は、投獄され、絞首、四肢分断の刑に処せられた。他の修道僧も拒否する者は投獄され、修道院は解散させられた。修道院の土地財産からの収入年額六四二ポンド、四ペンスは王の金庫に没収された。

この屋敷跡と建物は、王の狩猟官に使用が許されていたが、後売却されて一五六五年ノーフォーク公の手に渡り、彼はこゝを町の住所として大金を投じ豪華な住宅とした。今尚古いチャーターハウスの中心建物である。彼は後にメアリ女王への反逆罪に問われ、屋敷は没収されたが、エリザベス女王時代に、彼の次男サフォク伯に返された。トーマス・サットンはサフォク伯から譲り受けることになる。

トーマス・サットン

彼は一五三一年（又は二年）、リンカーンシァのネイスに生れた。父はリンカン州政治機関の事務局長、母は幼名をステープルトンといゝ、ヨークシァの名家の出であった。

サットンはイートン・カレッジ、セント・ジョンズ・カレッジ（ケンブリッジ）（一書によれば学僕（サイザー）として）〔註2〕に学び、学位を受ける前に、リンカーン法学院に入って法律の勉強をした。後数年間、オランダ、スペイン、イタリー旅行に過した。

帰国後彼はノーフォク公に知られ、後ウォイック伯の秘書となり、さらに北方軍需司令官に任命され、数年間バーイック地方（イングランドの最北端）に滞在した。後功によってニュー・カッスル地方に二ケ所の領地を得ることになった。この領地の地下に、豊富な石炭が埋蔵されていた。彼は一躍万金を獲得した。彼の金蔵は女王の金庫以上と噂されたほどであった。

彼はロンドンに帰り、銀行家として大陸に手を拡げ、外国の港々に三〇人もの代理人をおくほどになった。

彼の富は、一五八二年巨富をもつ寡婦ダドレー夫人と結婚することになって、さらに倍加されることになった。

サットンの愛国的事業として、二つを挙げることができる。

第一は、スペインの無敵艦隊イギリス侵寇を延引させたことである。

当時イギリスは、ジョン・ホーキンズを海軍艦隊本部長にすえ、ガレオン船二五隻建造を目標に、軍艦の新造、改装を急いでいた。沿岸整備だけではなく、遠く本国から離れた所でも、敵に致命的打撃を与え得る、海軍の新編成である。速度が早く、操縦し易く、重い大砲を積んで、しかも遠洋航海に耐える船である。こうした目的をもつ新しい船をガレオン船とよび、はじめスペインで軍船として工夫され、外国貿易に用いられていた。イギリスの最初の一隻が進水したのが、一五七五年であった。この船は長さ九二呎、巾三二呎、排水量四五〇トン、火砲五〇門、乗組員は二五〇名であった。この計画が一応目標を達成したのが、一五八七年のことである。〔註3〕

サー・ウォルシンガムのスパイが、スペインの侵寇計画を察知した。侵寇を一日でも引き延ばさせることがイギリスにとって絶対必要である。計画は遂に一年延期されることになったが、それは全くサットンの活躍の功によるものであった。無敵艦隊といえども軍資金なしには動くことは出来ない。サットンはスペイン王フイリップが資金調達めあてのの銀行資金を抑えてしまったのである。それほどイギリス

の経済力が伸びていたことの一証査でもある。
無敵艦隊が敗退したのは一五八八年のことで、こゝにスペインの後退、イギリス勢力伸長という、一大転機がつくり上げられることになる。

第二の大事業は、救済施設と無月謝学校建設である。彼の妻は一六〇二年没し、彼も老境に入り富の処分を考えた。子供もいない。ある人は男爵の位階と引換えにヨーク公（後のチャールス一世）に献上することをすゝめたが、彼は熟慮の末、全財産を「救済施設と無月謝の学校」のための基金にするよう決心した。この施設は頭初に述べた通り、はじめエセックスのハリングベリー・ブーチャに建てることにしていたが、死の直前になって、かって若い頃過したノーフォーク公の屋敷が手に入ることになり、彼は一万三千ポンドを投じて購入した。この移転登記は「死後財産寄贈についての勅許状」によって決定し、一六一一年一一月一日、サットンは遺贈に関する一切の書類に署名し終り、翌一二月の一二日、七九年の波らんにみちた生涯を終った。〔註4〕

遺贈された二万ポンドの使用については彼の遺志「ホスピタル、又は貧乏な人達のためのもの、そのような立派な事業、又は慈善事業」に使用することとした。

一つは、イギリスの将来のため、イングランドとスコットランド両国を結ぶのに最も有効な、ツィード河上のバーウィク橋がひどく痛み使用に堪えないので、その復旧のため半額を国庫に納入すること。

半額はホスピタル建設と維持のため、管理委員会に委托することにした。ホスピタルの事業は二つに分れている。

1、貧乏な教団員（ブラザー）のための宿泊施療院

こゝに収容する者は、善良な行為の持ち主、宗に教おいて健全な考え方の人で、王の臣下としての資格をもつ者、病弱者、老人、陸海軍人として奉仕した船長・隊長、傷い軍人、破産した商人、船の難破、火災等の災害に会った不幸な老人等である。

2、無月謝（フリー）グラマー・スクール

この学校創立の目的についてわかっていることは、

(1) ヘンリー八世の小修道院解散（一五三六年）、大修道院解散（一五三九年）の修道院立法は、イギリスの教育を壊滅の状態に追いこんだ。一五四六年から八年にかけて調査委員会の調査の結果、二五九の「財団法人組織（エンドウド・スクール）の学校」のうち、八六校が残っていたが、基本財産は縮少されていた。〔註5〕一掃された学校は殆んどラテン語を教えるグラマー・スクールであった。当時ラテン語は万国共通語である。各地で活動したサットンにとって、ラテン語が不自由なことは、そのまゝ商業上の敗者となることである。祖国興隆の基そは何をおいても学校の創立が第一で、ラテン語の出来る人物養成に着目したのである。

管理委員会は一六名の委員で発足（一六一三年）し、学校は一六一四年七月、校長と助教師、月謝無料の奨学生三五名で開校され、奨学生は同年中に四〇名に増員された。〔註6〕

彼は別に千ポンド、ロンドン市長に遺贈している。それは「資産はないが、若くて正直で商業に情熱を持つ、一〇人の若い商人に、年々貸与すること」という条件であったが、これも同じ精神に由来するものであった。

(2) 彼の学校の教育目標は「子供達にラテン語とギリシァ語の読み、書きを教授する」ことで、ギリシァ語は既に価値はなかったが、教育上は価値が高い。それであるのに宗教改革後重視されていなかった。サットン自身ギリシァ語に親しみ、現に彼の署名入りの、ソフォクレス（前四九五?—四〇六、ギリシァの悲劇詩）のトラキニア（一

五九三年版）が、学校図書館に秘蔵されている。

サットンは又ジーサス・カレッジ、モードリン・カレッジ（共にケンブリッジ大学）にも多額の遺贈をした。こゝから管理委員会は、これらの大学と緊密な連絡をとり、チャーターハウス校から優秀な卒業生を、特別奨学生としておくった。その数は一六一七年、一六三一年共に二七名に達した。〔註7〕

(3) 貧乏な生徒という意味は、極貧ということではないようである。既に一六一五年制服二着を用意することを命じている。これは奨学生が日曜日と授業を受ける時間中着用せねばならない。一六一七年には貧乏な奨学生の資格として、相当程度勉強した者であることを要求し、一六二七年には入学を許可される奨学生は「日常着用している服の外に制服一着、二枚のシャツ、三足のストッキング、三足の靴、学年相応の教科書、それらを購入し得る金額」を用意することを要求している。

(4) 最後にサットンは学校運営規則の制定については、管理委員会の良識に絶対の信頼をおいた。委員の一人ランスロット・アンドリュス（一五五九―一六二六年、エリー僧正、サットンの遺言執行人、マーチャント・テーラーズ校出身、イギリスの教育(1)二四頁参照）は、サットンに最も近い親友で、学校の創業に当っては彼の希望する、教会や国家の権威に属することのない自由な教育をめざし、大学入学の一段階とすることを任務としたことを、明瞭に読みとることができる。

以上の経過を辿って学校は開校されたが、一六一一年の勅許状に違憲の疑いがあるということで、再度管理委員会は勅許を得た、これが一六二七年の「古い制度」と呼ばれているものである。

無料の奨学生は管理委員の推せんによって採用されていた。この方法は一八七三年まで変更されることがなかった。

生徒は、無料の奨学生四〇名の外に、一定額の月謝を負担する自費生を採用することになる。

学校は共和国時代（ピュリタン革命、一六四八年共和制の宣言、一六六〇年王政復古）、苦難の道を歩いた。ブルック校長は政治的見解を共にしない少年を罰したという理由で追放された。これはオリバー・ウロムエルと管理委員間の意見の衝突があった為である。

若い熱心なラッセル校長時代の一八一八年、大改革が行われた。下級生を当番として上級生につけることは残酷であるとして廃止し、教育費が高すぎるので、安価にする為に教師の数を減らし、下学年生は最上級の監督生（モニター）徒が教え、上学年を校長と教師が教えた。始めはこの方法が成功したかに見え、生徒数が一八一八年二三八名、一八二五年四八〇名と増加した。生徒数四三〇名の頃教師は僅か八名であった。だがこの計画は失敗し、生徒は急減した。一八三三年には一〇四名となった。

一八三五年　九九名
一八四五年　一八七名
一八五五年　一三三名〔註9〕（報告書第一巻一七九頁）

と再び減少し、監督生徒制度を復活させることになった。

一八六二年の概況

1　財産収入（一八六一年三月末締切）

	ポンド	シリング	ペンス
繰越	一〇、七一九	四	一
賃貸収入	二七、一一七	一	一
其の他の収入			二分の一
合計	三九、二六一	一一	五、二分の一

支出合計　三一、〇七三、　一五、　〇、　二分の一

次年度繰越　八、一八七、　一六、　五、

（収入は、不動産目録によると家屋、土地、農場、森林等二一六件に及んでいる）支出は救済事業費が大部分を占め、学校に使用された金額の推定は、校長以下教師の報酬、奨学生の食料費その他で、

計　八、〇〇〇ポンド

外に卒業生（奨学生であった）の寄付がある。主として聖職禄で、計一〇件となっている。

ディッケン師、一〇〇〇エーカー収入一、一〇〇ポンド

ボード師、七一エーカー収入六三〇ポンド

外八件　収入合計約　四、七七五ポンド

2

生徒数　一一六名（一八六二年一月現在）

（生徒数の最高は、一八四五年の管理委員会規則で、二百名ときめられている。）

内　訳

(1)　無料の奨学生　四四名（将来六〇名に増員の予定）

古典、数学、地理、神学仏語、独語（六年のみ）歴史の授業、奨学生寮専任助教師監督のもとに寮に生活し、衣料も支給され無料、父母負担は洗濯、補修代として寮母へ年五ギニー（上級生、下級生は四ギニー）支払い、外に教科書、文房代を負担するのみである。特別奨学生たる特典、一八才試験で良好であれば、年八〇ポンド（四年間）受けてどの大学へも行ける、競争者はなく奨学生のみに解放されている。

(2)　通学生　三〇―三五名

月謝、年一八ギニー（一八ポンド一八シリング）

(3)　寮　生　四〇名

（校長寮二五、教頭寮一三、礼拝堂付牧師寮二名）

寮費年八〇ポンド（五、六年生は一〇ポンド増）

さらに将来の進学就職に必要な仏語独語化学を選択する者は年各二ギニー、図画五ギニー唱歌二ギニー支払う。

学級編成

6年　級	13名
5年　上　級	17
5年　下　級	11
4年　級	20
中間級	13
3年　級	19
2年　級	9
1年　級	10
初等級	11
欠　員	2
奨学生欠員	11
計	116

職員、古典教師校長共七名、外に仏、独、図画、音楽、唱歌、フェンシングの教師がいる。

入学生、年令の制限はない。

奨学生、一〇―一四才の制限があり、採用は試験による。一九才以後在学出来ない。

特別奨学生　一八才試験で良好な成績を得た者には次の奨学金が与えられる。どの大学にも入学できる。

(1)　八〇ポンド（四年間）

(2)　ホルフォド夫人奨学金、三〇ポンド五名、四〇ポンド一名、以上は奨学生を対象とする。

(3)　六〇ポンド二名、奨学生以外

(4)　タルボット奨学金三五ポンド一名

(5) ハベロック奨学金二〇ポンド、軍人、役人希望者に提供される。（報告書、第二巻二一一―二二六頁）

因みにこの年（一八六二年夏）の卒業生は二七名、内五名が大学へ（オックスフォド四名、ケンブリッジ一名）入学している。

尚卒業生で大学に在学中の者計三三名（オックス、二三名、ケンブ一〇名）である。（報告書第二巻三二頁）

この学校は一八七二年、救護施設から切り離され、ロンドンの南西サリー県、ゴーダルミンに広大な土地を求めて移転した〔註8〕

一九六四年現在、生徒数六五〇名、一三才から一八才の男子のみ、全員寮に収容している。〔註9〕

9 シティ・オブ・ロンドン・スクール

この学校の維持基金が設定されたのは、遠いヘンリー六世時代の一四四二年のことである。学校が事実開校されたのは約四百年後の、一八三七年のことである。

ロンドン市役所事務局長ジョン・カーペンターは一四四二年死に際し遺言し、市内の家屋その他の財産をロンドン市に寄付した。一五九八年発行、ジョン・ストーのロンドン市一覧に、「彼（カーペンター）は四人の貧乏な子供達に食事、飲物、衣服を給し、子供が希望するならば、大学で勉強させ、（成長したならば）その後を別な子供に代わらせて、いつまでも育てるよう、ロンドン市に家屋敷を寄付した。」〔註1〕

寄付された財産はロンドン市で管理され、年々四人の貧乏人の子供達が、この財産からの収益金で養育され、教育を受け続けてきた。明瞭に記録に残っている人員は、開校前九一年間に五三名、延べ三三四年、年平均三・六六名となっている。このうち個人として最も長期間養育され、教育を受けたヤコブ・ボットフィルドは、実に一七九三年から一八〇九年に至る一六年間、この奨学資金を受けて成人している。〔註2〕

ジョン・カーペンター

彼の生年月は正確にわかっていない。七〇才で遺言していることから、一三七一年又は二年に生れたものと推定される。どこで教育を受けたか、それもわかっていない。彼の父はリチャドといい、ろうそく製造人であった。

一四一七年、カーペンター四五才の頃、ロンドン市の事務局長（クランヒル）に選ばれた。

彼は一五世紀、都市発展の渦中で成長した。中世の活気ある時代、王と教会と封建諸侯が強力な勢力を誇っていたのに対し、一方では富裕な商人や工場主たちが、市政の中心的存在となってきた。ロンドンの町も早や、フランダース（北フランスからベルギー地方、商工業の最も早く発達した地方）地方や、イタリアの都市に劣らず、その狭い町通りが賑わっていた。ロンドンの商人達は、蓄積した富を、道路づくり、橋や学校づくり、慈善施設（ホスピタル）づくりに、惜しみなく投じていた。

カーペンターは、彼の事務監督下の、この町の発展振りを現に見つめていたわけである。イギリスが誇る大詩人チョーサーの時代である。商人達が使用する食器のナイフのさやには、も早や真鍮ではなく、銀で加工されている時代となっていた。

一三八一年農民一揆で有名なワット・タイラーの乱は、対フランス戦争、スコットランドとの戦争継続に必要な費用調達のため、一三七九年の議会が自由民・不自由民の別なく、一二才以上の者に人頭税を課したことに、端を発している。徴収成績が悪いので、一三八一年税を三倍にして、きびしく取り立てたのが直接の原因である。

加担する者は、農民は勿論のこと、ウイクリフ（一三二〇?―八四、英国宗教改革の先駆者）の共鳴者ロラード派、都市の永久職人や小親方、市民等約六万といわれる。

ロンドンの城門を開いたのは、彼等に味方する徒弟や一部の市参事会員（アルダーマン）達であっ。要望の最も大きいものは、農奴制度の全廃、市場税の廃止、小作人の地代一エーカー当り四ペンスの金納制の確立による、小作人の解放ということにあった〔註3〕

従来使用されてきた公用語フランス語に代って、英語が使用されはじめる時代で、英語を役所で正式に使用したのはカーペンターその人であったという。

一四一一年ロンドン新市庁舎の新築工事がはじまった。庁舎は市の繁栄の象徴である。後に親友となった市長ホイティントンと、事務局長カーペンターは、新築工事の進行を喜んだ。一四二二年ホイティントンは遺言によって、市庁舎に図書館を寄付し、カーペンターは遺言執行人となった。

新市庁舎に接して、礼拝堂があり、ここで市の大行事が行われていた。礼拝堂には二人の参事会員の寄付金で牧師が常勤していた。カーペンターはホイティントン図書館をこの礼拝堂の南側に建設して、これを礼拝堂付牧師の監督下におき、牧師一人を市費で増員した。彼はこの礼拝堂に、彼の寄付財産で養う子供を住まわせ、必要ある場合は唱歌隊員として奉仕させ、平日は学校で勉強させるという、二つの目的をもたせる決心をしたのである。

一四三六年、ロンドン代表として下院議員となり、三九年に引退、一四四二年五月二日、遺言を残して没した。彼の妻カサリンは一四五八年没している。

カーペンターの遺言

遺言には、彼の所有に属する家屋敷・土地とその所在を示す一覧を付し、永久にロンドン市の市長、収入役及び市民に寄付するとし、第一にカーペンター夫妻の命日に、厳そかな祭を取り行うこと、「そして私は、市長、収入役、市民各位が、前に述べた財産から入る利子、利益、収入をもって、ロンドン市民の中から四人の貧乏な子供を選び、永久に扶養すること、子供は俗にいう『カーペンターの子供』と称し、命日には礼拝堂の聖歌隊に奉仕させ、平日には最も便利な学校で強させること、それらの子供には週九ペンス与え、上衣（カウン）、下衣（チュニック）、長くつ下、靴、シャツのために年一三シリング四ペンス、寝台、理勉髪、洗濯のために年二六シリング八ペンス与え、礼拝堂の寮又は近くの適当な場所に宿泊させ、飲食物を与えて生活させるよう、遺言する。……」〔註4〕

この後に、日常生活の面倒を見る個人指導者に年一三シリング四ペンス支払うこと、その他述べてあるが、その教育については何も述べていない。

「カーペンターの子供」

カーペンターの遺贈財産収入は、一四四二年一九ポンド一〇シリングで、これで年々四名の貧乏な子供が養育され、教育され続けられたのであるが、通学した学校はどこであったろうか、興味のある問題である。最初の頃はセント・アンソニー施設（ホスピタル）であったと想像される。

一九三六年のこと、ジョンズの努力で、記録の一部がロンドン市役所領収綴、その他職員給料会計簿、年金名簿等から発見された。これが補遺Aである。それによると、一六四九年から八八年までの三八年間が、一七八六年から一八二九年までの四三年間、計八一年間の奨学生四六名に及び、支給年数延べ二九九年、年平均三・六九名、受給期間平均六・五年となっている。最高は先に述べたポットフィルドの一六年である。

通学した学校は、同時代の学校記録を探す外はない。カーペンター奨学生一六六二―六八年の記録が、たまたまマーチャント・テーラーズ校の記録の中に発見された。

その中の一人、エドモンド・アーチャーは、一六八五年奨学生となっている（いつまで在学したか明瞭でないが、ジョンズは八八年と推定している）。マーチャント・テーラーズ校には明瞭に一六八四年から九一年まで七年間在学し、その後オックスフォド大学のセント・ジョンズ・カレッジに入学、神学博士の学位を受け、ウエルズ聖堂事務局長となっている。〔註5〕

記録の中断はあったが、このように「カーペンターの子供」は一八二六年まで引続き養育され教育された。

「カーペンターの子供」の両親

これらの子供達の両親については、記録の中から代表的なものを拾い上げてみると、

エドワードプライス、一六五二年（六才）から六二年まで、ダエニル理髪外科医（昔床屋は必要に応じて放血をしたという）の子

ジョン・チェバル、一六五四年（七才）から六二年まで、鉛工フランシスの子

その他寡婦の子、教会書記の子、書記の子、公証人の子等の記録が出ている。

さらに市会計簿（一六三三年以後完全に残されている）記載記事から、遺贈を受ける対象となる両親の層の変化を知ることができる。

一六三三年の記載事項欄には「四人の貧乏な子供」と記し、一六九一年では「カーペンターの遺贈で養育される子供」と記し、翌年になると「四人の自由市民の子」と記している。この頃から古い「貧乏な子供」という伝統から離れ、自由市民と、市内に居住する者の子供と、意識的かどうか不明ではあるが層が広くなってきていることがわかる。

遺贈財産の経理

遺贈財産会計記録最初のものは、一五三六―七年のもので、図書館付牧師への三カ月毎の支払いのことが出ている。

修道院解散法（一五三九年）の礼拝堂解散没収では、危機に陥ったが、ロンドン市が三年後に王から建物を買い受けている。

遺贈財産は、家屋敷それに付属する馬車小屋、うまや等で、家屋だけでも総計一一五軒となっている〔註6〕

一六三三年の会計簿の帳尻は、

収入　四九ポンド　一三シリング　四ペンス

支出　二〇　一三　四　（諸費用）
　　一八　〇　〇　（子供用）

諸費用とは徴収費、補修費、人件費その他の雑費を含み、この年の残金一〇ポンドは「市金庫へ現金貸」として保管されている。〔註7〕

子供の衣料支給例として、一五六三年会計簿では、外とう二着、クリスマス支給分、あづき色のがんじょうなラシャ、一ヤード六シリング八ペンス計三三シリング四ペンス（四人分）、復活祭支給分、一ヤード五シリング八ペンス計二八シリング八シリング四ペンスとある。所が一六八〇年には一着支給となっている〔註8〕

後になって一八二七年、トンブリッジ校の寮に委託された子供の、衣料品は、

服（三揃）二着外に夏の短ズボン二着、
リンネルのシャツ　六枚

木綿のシャツ	二枚
夜の帽子（ナイト・キャップ）	四個
黒の絹ハンカチ	二枚
帽子（つばのあるもの）	一個
帽子（つばのないもの）	一個
ウーステッド長靴下	六足
木綿の長靴下	六足
靴	三足
外とう	一着
ポケット用ハンカチ	六枚

〔註9〕

以上が慈善施設にいる子供への支給品である。

会計事務は堅実に実施され、収入は左記のように年々増加した。

一四四一年	一九ポンド	一〇シリング	〇ペンス
一五六三	二七	三	三
一六三三	四九	一三	四
一七三三	一一四	〇	〇
一八二六	七五〇	六	五
一八六二	二、五〇〇	〇	〇

〔註10〕

トンブリッジ校のカーペンター奨学生

一八二〇年代ロンドン市議会の難問題の第一は、カーペンター遺贈財産の徹底的管理、第二は、ロンドン貧民院にまつわる醜聞、第三は、今は不用となったホニー通り市場、この解決にロンドン市議会の、慈善委員会、土地委員会が乗り出した。

一八二六年六月、土地委員会の勧告は、将来七才から一五才の四人の貧乏な子供は、市の手で衣服、宿泊、教育を与えること、子供達は古典・商業教育を受けること、宗教教育はイギリス国教会の教義によること、さらに子供達はノックス博士の監督下に、トンブリッジ校で教育さるべきこと、子供達が一五才に達して社会に出る時に、仕度金として百ポンド支給すること、最後に服装は青色の上衣とし、慈善行為の対象児であることを示す、バッジを常時つけることを勧告した。

トンブリッジ校は、、ロンドンの皮革商アンドリュー・ジャッドが彼の莫大な財産で一五五三年、トンブリッジとその周辺の子供を、無料で教育するために、創立した学校である。カーペンター奨学生の交渉を受けた、校長ノックス博士（一八一二就任、三一年間在勤）は、「当校生徒にはたとえ名誉章であろうと、差別をつけるべきではない、あらゆる差別は進歩を阻害する」〔註11〕として、バッジ着用を排し八才以下の者は入学を許可しないと通告した。

この学校に七名をおくられ、延べ三三五年間、平均五年在学している。うち三名は後シティ・オブ・ロンドン・スクール開校と同時に同校に引きとられている。

シティ・オブ・ロンドン・スクールの構想

市議会、土地委員ジェムズは、カーペンター資金は一八二六年千ポンドを越しているのに、四人の子供に五百ポンド使用しているのみ、慈善資金は最も教育を必要とする多数の者に、与えるべきではないか。それ故、この目的に従って、ロンドンに通学制の学校を創立すべきだと、重大な提案をし、賛成者もあったが、すすまなかった。

一八三二年、奨学金支給方法への不満が、土地委員会に持ち込まれ、特別委員会が結成された。会計簿と報告書を調査した結果、大改善の時期に達していることが確認された。

ロンドン貧民館（ワーク・ハウス）

この施設は一六六二年創設され、貧乏人や浮浪者を収容し、働らける者は就労させ、貧乏で見捨てられた子供達も収容し、年々市金庫から三百ポンド支出していた。しかし常に醜聞が絶えず、収容している子供達の教育の仕方にも問題があった。管理委員会は子供達を別にし、ロンドン市の中等学校（ハイ・スクール）を建設すべきことを報告した。彼等はクライスト・ホスピタルのような学校を考えていたのではないだろうか。そこに、

零落した貧民の子供の教育か、

中産階級の子供の教育か、

一般市民の教育か、という問題がおこる。

漸く学校は、男児のためのグラマー・スクールの名で呼ばれる性質〔註12〕の学校ときまったのが、一八三二年五月一五日で、早速市民のための新学校の細則、命令書、資金係、学校用地の買収準備がすすめられた。

翌年ストームズ・ヘイル議員が土地委員長に就任すると、学校建設は新段階を迎える。

ヘイルは一七九一年生れ、早く孤児となり、一三才でロンドンに出て、兄が経営しているろうそく屋の徒弟となった。長じてフランスの化学者ルザーク等と提けいして、動物性脂肪と植物性油脂の混合加工に成功し、財を蓄えた。後ロンドン市会議員となったが、本来義侠心に富む人物であった。彼は後に、シティ・オブ・ロンドン・スクール第二の創立者といわれたほど、この学校創立に努力した。

「ロンドン貧民館管理委員会」は、「シティ・オブ・ロンドン・コーポレーション・スクール管理委員会」と改称された。

翌三四年「シティ・オブ・ロンドン・スクール委員会」が発足し、ヘイルが委員長となり、国会に学校設立請願書が提出された。

二月二五日、請願書は下院の議案の中に入れられ、第一読会、四月二九日、第二読会で、貧民館の資金を新学校に流用することを不当とし、ヘイルの活躍で分離することに成功、

七月二九日、第三読会通過、

八月一三日（一八三四年、ウイリアム四世の勅裁を得て、決定した。

これでロンドンにグラマー・スクールが設立されることになったが、これは時代の要望する新傾向の学校が目的であった。

しかしヘイル委員長は「貧乏な見捨てられた子供」のことを忘れ去ったのではない。この方は一八五四年、ブリクストンに「孤児学校」が開かれ、現在はアシュテッド公園にも「自由市民の学校」として、ロンドン市で管理経営されている。〔註13〕

シティ・オブ・ロンドン・スクール

開校準備

校長（ファースト・マスター）、教頭（セカンド・マスター）の選任。選考委員はロンドンのキングズ・カレッジ、神学・古典・文学・数学教授、ロンドン大学のギリシア語・数学・物理学・天文学の教授六名が選ばれ、志願者の中から適任者を三名候補者として選考する。市議会が指名するという賢明な方法であった。こうして第一代ジャイルズ、第二代モーティマー、第三代アボットが選任された。

建設の第一石は一八三五年一〇月打込まれた。

教育課程

編成にはユニバーシティ・カレッジ校長ケーイ博士、キングス・カレッジ・スクール校長メイヤー神学博士が参画し、最も進歩的な、市民のための教育課程が編成された。

一般課程

音の抑揚と適当な強声をつけて読む。
英語文法と作文
ラテン語、ギリシア語、フランス語、
書写、算術と簿記、数学と物理学、地理学と博物学、古代・現代の歴史、合唱の基礎、化学と自然科学、聖書講義

特殊課程

ヘブライ語、ドイツ語、スペイン語、イタリー語は希望による。図画、文学、科学で高度のものを要求する者のため、上級の学級を設ける。イギリス文学、フランス文学についても同様とし、特別な費用は徴収しない。ギリシア・ローマの古代文化、数学・物理学・論理学・倫理学の上級学級の編成も考慮する。

以上は歴史的記録といえるほど進歩的なものである。商業上の必要からとはいえ、国民教育上画期的なものであった。当時アーノルド博士（一八二八―四一在職）がラグビー校（イギリスの教育(1)）で、フランス語、ドイツ語を取入れたばかりの頃である。

開校されたのは一八三七年二月、ヘイル氏の誕生日に当り、カーペンターが貧乏な四人の子供達に遺贈して、三九五年後のことである。聖書を抱いたカーペンターの彫像は、現在も玄関ホールで、登下校する生徒達の勉学を見守っている。学校は四百名定員の通学制として設計されたが、当初二百名で開校され、三月には早や四九五名にふくれ上った。建築費は凡そ二万ポンド要している。現在の生徒数は約七百名である。〔註14〕

カーペンター奨学生（スカラー）

トンブリッジ校から三名転入し、モーティモァ校長（一八四〇―六五在職）時代の四一年には八名〔註15〕に増員された。この校長は一六人の子供の父で、少くとも一〇名はこの学校で教育を受け、この面でもレコードホルダーだという。奨学生は授業料が免除される外、書籍代年二ポンド、諸費二五ポンド支給され、卒業と同時に支度金五〇ポンド支給されることになっている。

特別奨学生〔註16〕

1　八名、年二五ポンド四ケ年、カーペンター奨学生
2　一名、年二二ポンド四ケ年、テッグ奨学生
3　一名、年三〇ポンド四年、タイムズ紙奨学生
4　二名、年五〇ポンド、年三一ポンドづつ、サロモン奨学生
5　一名、年五〇ポンド四年、トラヴァズ奨学生
6　一名、年四九ポンド、四年、ジョンズ奨学生
7　一名、年三〇ポンド三年、トーマス医学奨学生
8　一名、年五〇ポンド四年、飾り職組合奨学生（ワールドスミス・カムパニー）
9　二名、年五〇ポンド四年、食料品組合奨学生（グローサーズ・カンパニー）
10　一名、年三〇ポンド四年、マスタマン奨学生
11　五名、年六〇、四三、四〇、二五、二〇ポンド
12　四名、年五〇ポンド、ビュフォイ奨学生

ビュフォイ氏についてはもっと詳細に述べる必要を痛感する。彼は食用酢とぶどう酒製造工場主で科学に関心を持ち、一八四三年数学奨励のため在学生に、メダル賞金を寄付したのにはじまり、約九千ポンドの価値ある財産を寄付した。翌年数学研究のため奨学金を設定してから、四五年古典、四八年数学、五〇年数学奨学生を四回にわたり設定した。

ビュフォイ奨学生第一号となったホーズは、ケンブリッジ、トリニティ、カレッジに学んだ。引き続いて数学研究奨学生がおくられ、一

八四七年ラングラー（ケンブリッジ大学数学学位試験第一級優等者）第五位は当校卒業生のエメリー、翌年ホーズ第九位、コールが二六位となり、この三人によって早くも、当校への信頼度が確立された。

ビュフォイ氏の義挙に感じたモーティマー校長は、ビュフォイ氏を記念するため、一八五〇年記念の休日を設定した。（この記念日は二三年後の一八七三年、偉大であった第二代校長記念のため、ビュフォイ・モーティマー記念日と改称されている）〔註17〕

シェクスピア賞設定

ビュフォイはさらにシェクスピア研究奨励基金として千ポンド、金メダル基金として三百ポンドの寄付を追加した。学校ではシェクスピア研究三賞を設けた。

1　シェクスピア作文賞
2　シェクスピア暗誦賞
3　作品についての試験の優秀賞

シェクスピア賞には、金、銀、銅賞があって、一人で三賞を獲得した者のみ金賞が渡される。イギリスが誇るシェクスピア研究に着目したことは、この学校独特の伝統となり、その比類のないほどの進歩には、ビュフォイ自身驚いているにちがいない。

金賞第一号、

後のサー・ジョン・シーリー（一八三四―九五）は、クライスト・カレッジで古典最優秀賞（トリプス）の第一位と総長賞（チャンセラーズ・メダル）を受け、卒業後も残って特別研究員、古典指導教師（チューター）となり、一八六一年母校の古典作文教師となって、モーティマー校長を助け、後にロンドンのユニバーシティ・カレッジの教授となった。代表的著作は「イギリス政策の成長」である。〔註18〕

エドウィン・アボット（一八三八―一九二六）

彼はロンドンに生れ、一八五〇年にロンドンスクールに入学、五三年カーペンター奨学生、五四年から五七年までに学校の主将をつとめ、シェクスピア三賞を独占する成績をとり、ケンブリッジでは古典最優秀賞と総長賞を獲得、神学でも最優等生として卒業、六二年セント・ジョンズ・カレッジの特別研究員となって後、二六才で母校シティ・オブ・ロンドン・スクールの校長に就任した。二四年勤めた。校長としての名声高く、各地の学校や大学から招へい状が届いたが、彼はあくまで止まった。彼はラテン語、ギリシア語の学識の上に、ヘブライ語、シリア語、アラム語の研究をすすめて、聖書を深く研究した。またエリザベス時代の文章法が混とんとしているのを見かねて、一八七〇年書いた「シェクスピアの文法」は、イギリスでも第一級の研究で、一躍彼の名を有名にした。

ビュフォイ賞が彼にどんな刺戟を与えたか、モーティマー校長が直接英文学を教えたかのように信じている人が多いことを打消した手紙の中で、

「……私は学校（C・L・S）に六・七年在学したが、（英文学については）ただの一語も教わらなかった（シェクピア）作文賞をもらった外は何もなかった。シェクピアの戯曲について、一度試験を受けたが、何かを教えられたのではない。英文学の研究は、シーリー（アボット入学の時の学校の主将）の援助と刺戟によって、私が取り入れたものです……」〔註19〕

シーリーは、アボットとの共著の中で、C・L・S時代を回想し、シェクスピア研究について書いている。

「われらの学校生活を回想するに、あなた（モーティマー校長）の監督下で満喫した教育利点は、ビュフォイ基金で設けられた特別賞で、われらが特に刺戟を受けた、シェクスピア作品の研究より大なるもの

はありませんでした。われらがこの研究から啓示された恩恵は、この研究が当時随意科目で、極く少数の者しか関心を持っていなかったことを思うと、将来英語と英文学が正課となった暁には、この利点は全く国民への恩恵の中心となるほど、偉大なものとなるであろうと、思わざるを得ません。」〔註20〕

シェクスピア賞が、若い未完成品達にどんなに強い刺戟となり、その結果どんな国民的至宝を創造し得たか、瞠目すべき成果だと考える。

日本人教育に当ったダイヴァス

この学校の化学教師トーマス・ホールは、イギリスの学校ではじめて化学を教えた教師〔註21〕である。彼の化学教室は一八四七年開かれているが、これは開校後一〇年たっている。この教室で化学への眼を覚まされたエドワード・ダイヴァズ（一八三八―一九一二）は、王立化学院で学び、さらにガルウェイのクインズ・カレッジで医学を学んだ。後に彼は日本政府の招へいに応じ、一八七三年（明治六年）来日、大学教授として日本の医学、化学教育に尽すいすること二六年間、明治期の日本文化向上に努力した。一八九九年退官し、帰国している。〔註22〕

H・H・アスキス

第一次大戦当時の自由党総裁、首相（一九〇八―一六）アスキスも当校出身で、在学時代の一八六九―七〇年、学校の主将（キャプテン）をつとめていたことが、主将名簿に登載してある。〔註23〕

一八六二年の概況

第二代モーティマー校長就任二三年後の一八六二年一〇月、パブリック・スクール調査委員会への報告書から、創業時代の概況を摘記してみることにする。

1 生徒数　六二六名

学校を上級、下級学校に分つ

(1) 下級学校（ロワー・スクール）（又は英語学校）二五〇名

四学級に編成している。英語が充分読めるようになった、七・八才で入学させ、読み、書き、綴り、英文法、歴史、地理、算術、聖書を四人の教師で教え、外に書写教師一名をおく。年二回、上級学校へ進級する機会を与える。

(2) 上級学校（アッパー・スクール）（又は文法学校（グラマー・スクール））三七〇―三八〇名、八学級に編成し八名の教師と校長付助教師（作文担当教師）で教え、外にフランス語教師二名、書写教師二名がいる。

教科はラテン語、ギリシア語及びその作文、フランス語、地理、歴史、英作文、算術、数学、書写、簿記、この外に技術や製造業に関係の深い物理学、化学初歩を、上・下級学校の希望者で特に四学級に編成し、特に雇った教師で特殊講義を行なっている。これは自然界の秘密を解く鍵であると同時に、ロンドンの実業界にすすむこの学校の生徒にとっては、最も必要なことである。

外に随意科としてはドイツ語に百名、図工科に百名、合唱科に八〇名いる。

正科の授業は二九時間とし、古典（神学、歴史を含む）に一五時間半、数学に九時間半をさき、フランス語三時間、物理学一時間、書写は古典に、簿記は数学の時間をさいている。

この学校は通学制で、教師は生徒の生活指導面は全く両親に委ねることが出来るので、教科指導以外の時間は、研究室で教材研究に打ち込むことが出来る。

勤勉な生徒達は、日割をきめて週に二、三時間、この研究室で特別

な指導を受けることができる。

この学校の生徒達の両親は、専門職、商業、貿易に従事していて、子供達に自由でしかも役に立つ教育を望んでいる。

学校の教育課程が多種多様であることは、それだけ生徒に努力する機会を与えることになる。古典では不得手な者も、数学、物理、化学では優秀な能力を発揮する者がいる。

ケンブリッジのメーヤー教授は、この学校の古典試験官でもあるが当校の教育を批評した言葉の中で、

第一に、この学校では、生徒をどれか一つのきまった型へつめこむのではなく、各人の能力を伸ばすための組織機構に、柔軟性がある。

第二に、学校のすみずみまで、どんな仕事でもやり通すという、不屈の精神がみなぎっている、と。

私（モーティマー）の主張は、古典にあてる時間を、他の学校より少くしてでも、他の教科に広く親しませて、彼等の知力を磨かせることである。数種の教科を研究する能力を訓練された生徒は、彼等の前に設定された新しい課題に、早速取り組むことが出来る。化学や物理研究に一週一時間では短かいという説もあるかも知れないが、算術や数学でうんと訓練された者にとっては、短かいとはいえないと思っている。

こうした者の中から、一八六一年南ケンシントン博物館主催第一回科学・技術部門の試験で、理論物理学、実験物理学の女王金賞を獲得する者が出現したのである。

今年も同様に、金賞、二つの銀賞、四ケの女王奨励金のうち二ケを獲得できた。このような立派な結果をもたらしたものは、当校の数学重視の賜だと考えている。

なお、二三年前、私が就任した年三百名いた生徒は、現在収容し切れないほどになった。奨学生も、カーペンター奨学生が八名に増員された外、特別な寄贈者のおかげで総員二八名となった。

授業料　年九ポンド

一般市民に広く開放する意味からも、最も低い金額である。マーチャント・テーラズ校は同じく通学制で一〇ポンドである（第八表(2)参照）

2　大学進学者

一八五七年から六二年までの六年間に、学位を受けた者の数

一六名、内、奨学生一四、自費生二、（全員ケンブリッジの各カレッジ卒）彼等の卒業成績

数学の学位試験　第一級優等者（ラングラー）　八名

同　第二位優等者（オプトミー）　二名

同　第三位優等者（ジュニア・オプトミー）　一名

古典優等者（クラシック・トリポス）二名、神学優等者（セオロジカル・トリポス）、総長賞各一名、普通卒業者（ポール）一名の一六名。この年すでに特別研究員（フェロー）となっている者五名を算える。

3　大学在学中の者

一八名、内、奨学生一四名、特別免費生（サイザー）二名、自費生二名。

ケンブリッジ一六名、オックスフォド二名、以上は二大学のみに限定した数字であるが、奨学生の数が圧倒的であることは、驚くべきことである。

10　財団法人組織の学校

イギリスの全然公費を受けない独立学校、一部受ける直接補助学校の占める位置が高いことを、まえがきで述べた。それらの学校の多くは一六世紀を中心に、貧乏な子供を無料で教育する無月謝学校（フリー・スクール）として

創立され、学校財産は勅許状で保障されている、いわゆる財団法人組織の学校 Endowed School として出発したこと、それらフリー・スクール数校の

創立者と創立の目的

学校財産の設定

無月謝生徒の教育と自費生

卒業生を大学におくる特別奨学生制度の概要について述べてきた。

こうして一九世紀を迎え、クラレンドン報告書にある現状まで述べ、また時代の要求に従い、奨学生の外に、多数の希望者を自費生として受け入れ、その数が次第に急増したことも、すでに述べた通りである。

しかし時代は、自費生を増員する程度では処理しきれない、いわゆるイギリス産業革命の頂上期に到達しょうとしている。当面する問題は、庶民の教育、義務教育を考えねばならない時にさしかかっていた。

ここでイギリスが真の近代を迎える、躍動期の当面する問題を二、三挙げると、

◎一八三二年、選挙法の大改正

新興市民階級に選挙権が拡大され、有権者は従来の一六万人余から、一挙に九三万余人となり、中産階級以上に被選挙権が与えられた。この改正前は、ヘンリー五世時代、庶民院選挙権を一年四〇シリング以上の土地収益のある、自由土地保有農民（いわゆるヨーマン）に限定した一四三〇年の法が生きていたのである。四百年後の大改正であった。〔註1〕

◎一八三三年の教育法

一般庶民の教育は、教会または個人等の慈善団体が経営する学校で行なわれていた。校舎建設の補助として、政府がはじめて「総額二万ポンドを超えない範囲で、貧困階級の児童教育のため、学校建物を建設する目的で、個人的寄付金の補助にあてるべく、資金を交付する」〔註2〕法が制定された。

僅かに二万ポンド、それもがら空きの下院で、投票五〇、賛成二六、漸く可決されたという。これは三九年になると、補助申請三〇七校に増加し、

一八三九年	三万ポンド
一八四七	一〇
一八五一	一五
一八五七	五四
一八六六	八七

と増加した。〔註3〕

◎一八三四年　工場法の制定

工場監督官、工場医制度の実施と同時に、一四才未満の全ての子供は、毎週二時間教育を受けること、九才未満の年少者の雇用禁止、九―一三才、一四―一八才の就労時間を制限する規定などを含んでいる。〔註4〕

こうして学校数も急増し、その数は英国国教会が推進する、国民教育協会の教育統計その他を参考にして、カーティスは「英国教育史」の中で、（一八五一年）

学　校　数	一八、五一五校
児　童　数	一、一八〇、八六五名

と計算し、残念ながらこの数の中には、日曜学校出席者も含まれている、と補足している。〔註5〕。日曜学校は、週日には工場で働き、

日曜こそは息抜きとして、路地裏で遊び、非行に走る子供達のための慈善学校であった。

当時の初等教育については、女王の視学官マッシュー・アーノルドの報告書に、

「一八五一年一〇月一四日、巡回報告、過去半年間に四七校視察、そのうち三五校はウェズレー派（メソジスト教会）教会学校、一番の問題は月謝だ。ウェズレー派が最も高く、各人週二―八ペンスのうち三―四ペンスが最も多い。これは困窮者を締めだす高額である。この派の学校には、商人、農業者、高給職工の子供達が通い、一人の教師は四〇―五〇名受持っている。

ある者は月謝も低額で入学を許可されてはいるが、月謝の金額に相当するだけ、時間数も少く数えられ、高い月謝の者は進級が早いのに低額納入者は一向顧みられていない」〔註6〕（M・アーノルド（一八二二―八八）は、詩人、文芸評論家、トーマス・アノールドの長男、ラグビー校、バリオル・カレッジを出た後、ラグビー校助教師、一八五一年から二八年間女王の視学官として、国民教育の向上に努力した）。

このような情勢下でイギリス議会は、将来義務教育実施の必要性を見こして、調査の必要にせまられていた。差し当って補助金が有効適切に使用されているか、そのための調査委員会を出発させた。ニューカッスル公を委員長とする調査委員会で、その報告は委員長の名を冠する、いわゆる

1　ニューカッスル報告書（一八六一年報告）

次にパブリックスクールの財産と管理、教育の実態調査委員会が発足し、委員会はイートン校はじめ九校について報告した。いわゆる、

2　クラレンドン報告書（一八六四年報告）、引き続き、以上の二報告にもれた全学校について調査が実施された。いわゆる、

3　トーントン報告書（一八六八年報告）、

以上の資料、並びにこれに基づくH・ストーントン〔註7〕、T・J・H・ビショップ〔註8〕の調果をもとにして、筆者は連綿と続き今尚重要な役割りを果している、「財団法人組織の学校」七九五校の実態について、フリー・スクールの特質を最も明瞭に示す評細な統計表を作成した。

1　創立年代別一覧表
2　創立者職業別一覧表
3　各校の年間収入別一覧表
4　一八六〇年代無月謝生徒数別一覧表
5　特別奨学金別一覧表
6　父母負担と学校財産収入
7　一九世紀学校財政

第一表、一七世紀までに八〇％創立。

第二表、個人特志家が最高、しかし第三表の註にあるように基本財産収入は少い。聖職者も多く、女王、王が多いのは修道院の没収財産を寄進されて、創立又は再建された学校である、市又は市民の寄付金によるものも多い。組合は直接又は間接に関係している。列挙すると、毛織物業者組合（クロスワーカーズ・カンパニー）、魚商人（フィシュモンガーズ）、服地商（ドレーパーズ）、小間物商（ハーバーダッシャ）、食料品商（グローサーズ）、絹織物商（マーサーズ）、醸造業（ブルーワーズ）、桶屋業（クーパーズ）、出版業（ステーショナーズ）、飾り職（ゴールドスミス）、皮革商業（スキンナーズ）が関係し、同業組合七八（註9）そのうちの大組合一二で関係していないのは、製塩業（サルターズ）と金物商（アイアンモンガーズ）の二組合だけである。活発な活動をした個人、組合、団体ほど公共慈善事業に積極的であったことが、これでよくわかる。

第三表、総収入二六万ポンド一校平均三二五ポンド。クライスト・ホスピタルは五万六千ポンドの収入で、これはロンドンとハーフォドの

二校、救貧施設に分配される。ここではウィルキンソンの分析に従った（第七表参照）。当時の国庫支出金と比し、巨大な金額であることがわかる。

第四表、希望者全員無料入学の学校は除く。人員が記載してある学校のみで二五九校、一〇、三六七名となる。バークシァのセント・アンドリウス・カレッジは、牧師スティブンが一八五九年創立し、父親のいない子供、貧乏な子供計一六名を無料で収容し、他に三百名の寮生がいる〔註10〕奨学生が最も多いのは、ロンドンのセント・オレーブとセント・ジョンズ校で、古典科百名、商業科二百名、初等科三百名幼児学校六百名収容している。全員に教科書、文房具を支給し、無料で教育している。年間慈善収入四、六〇五ポンド、このうち二、四一三ポンドを学校が使用している。〔註11〕

第1表

創立年代一覧

（1868年）

世紀	学校数	%
12 — 15	37	5
16	283	36
17	306	38
18	127	16
19	27	3
不明	15	2
計	795	100

第3表

基本財産収入

学校別一覧

（1861—68年平均）

収入	学校数
ポンド	
0—50	335
51—100	190
101—500	179
501—2,000	63
2,001—5,000	20
5,001—10,000	3
10,000—20,000	5
合計 ポンド 259,005	795

〔註〕
一校平均　325ポンド

個人特志家創立の 455校について見ると
1校　平均　132ポンド

第2表

創立者別一覧（1868年）

創立者		学校数	
個人特志家		455	
	個人		344
	ナイト称号		63
	博士号		17
	その他		31
聖職者		119	
	牧師		50
	僧正		45
	小修道院長		13
王・女王		80	
	エリザベス女王		26
	エドワード6世		25
市・市民		60	
	寄付金		24
	住民		14
組合		10	
施設		4	
不明		68	
計		795	

第5表

特別奨学資金支給金額及件数 一覧

(1861—68年)

1件金額	件数	小計
ポンド		
2—8	86	445
10—	62	883
20—	101	2,082
30—	89	2,798
40—	149	6,035
50—	219	10,956
60—	54	3,266
70—	111	8,290
80—	41	3,280
90—	2	196
100—120	40	4,040
	953	42,271
1件平均約	44ポンド	

特別奨学生を大学に送っている学校数 301校

第4表

無月謝生徒数

(1861—1868年)

生徒数	学校数
1—9名	49
10名以上	62
20—	39
30—	28
40—	20
50—	17
60—	13
70—	12
80—	9
100—	7
200—	1
400—	
600—	
700—	
1,200—	2
合計	
10,367名	259校

備考

クライスト・ホスピタル
ロンドン 775名
ハーフォド 449

セント・オレーブ
古典科 (100) 商業科 (200)
初等科 (300) 幼児科 (600)

第6表

父母負担と財産収入

(1868年)

	学校収入		計	財産収入の占める割合	生徒1人当費用
	月謝(父母負担)	財産収入			
			ポンド		ポンド
ウインチェスター	7,068	10,500	17,568	60%	81
チャターハウス	2,870	8,000	10,870	74	80
ハロー	33,857	1,050	34,907	3	73
イートン	45,023	13,000	58,023	22	70

第 7 表

19 世紀学校財政 (1)

学校名	調査年	基本財産総収入	平均年収入	学校負担	父母負担 通学生	父母負担 寮生	父母負担計	合計	一人当教育費	総生徒数
		ポンド	ポンド	ポンド	ポンド		ポンド	ポンド	ポンド	
ウインチェスター	1,862	17,000	15,000	15,000 〔10,500〕	—	〔7,068〕	〔7,068〕	〔22,068〕 (17,563)	〔102〕 (81)	216
イートン	61	20,569	17,000	17,000 〔13,000〕	〔550〕	〔44,473〕	〔45,023〕	〔62,023〕 (58,023)	〔75〕 (70)	829
ハロー	62	1,050	1,050	1,050	〔412〕	〔33,445〕	〔33,857〕	〔34,907〕	〔73〕	481
ラグビー	62	5,653	4,350	4,350	〔96〕	〔19,077〕	〔19,173〕	〔23,523〕	〔51〕	463
チャーターハウス	62	22,750	8,000	〔8,000〕	〔890〕	〔1,980〕	〔2,870〕	〔10,870	〔80〕	136
ウエストミンスター	61	2,250	2,250	〔348〕	〔971〕	〔2,805〕	〔3,776〕	〔4,124〕	〔30〕	136
セント・ポールズ	62	9,550	7,500	〔7,500〕	—	—	—	〔7,500	〔48〕	153
マーチャント・テーラーズ	61	2,000	2,000	〔1,873〕	〔2,500〕	—	〔2,580〕	〔4,417〕	〔17〕	258
クライスト・ホスピタル	64—68	56,000								
ロンドン			31,000	9,236	—	—	—	〔9,236〕	12	775
ハーフォド	—		11,000	2,462	—	—	—	〔2,462〕	5	449

第 8 表

19 世紀学校財政 (2)

	通学生			寮生		通学生父母負担		寮生父母負担	
	無料生	奨学生	自費生	奨学生	自費生	奨学生	自費生	奨学生	自費生
						ポンド	ポンド	ポンド	ポンド
ウインチェスター	—	—	—	70	146	—	—	無料	85—105
イートン	—	—	20—30	70	719—29	—	22	25	150—210
ハロー	—	32	10	—	49	18	41	—	109—176
ラグビー	61	—	6	—	396	無料	16	—	87—91
チャーターハウス	—	—	47	44	45	—	19	無料	80—90
ウエストミンスター	4	—	37	40	55	17	26	35	94
セント・ポールズ	153	—	—	—	—	無料	—	—	—
マーチャント・テーラーズ	—	—	258	—	—	—	10	—	—
クライスト・ホスピタル ロンドン	—	—	—	775	—	—	—	無料	—
ハーフォド	—	—	—	449	—	—	—	無料	—

第五表、特別奨学金の件数と総額である。最高は年一二ポ〇ンド部屋づき、四年又は七年間支給、大学に特別研究員（フェロー）とし残る者には研究と生活が保証される。最低二―八ポンドに八六件あるが、この金額だけ受けた者は「特別免費生（サイザー）」として苦学した者と思われる。総額四万二千ポンド一人平均四四ポンド九五三名。

当時（一八六一年）大学在学生数は、

オックスフォド、二四カレッジ、一、六七四名、ケンブリッジ、一七カレッジ、一、四八三名計三、一五七名（クラレンドン報告書、第二巻、三一頁）。この中に九五三名全員入学しているとすれば約三〇%を占める計算となる。大学自体の財産で賄う奨学生は別となるので、在学する奨学生の数はもっと多くなる。

第六、七、八表、奨学生、自費生の詳細な負担区分である。創立者の意志をどこまでも尊重し、ウインチェスターでは七〇名の奨学生は寮に収容して無料、セントポールズ校では一五三名通学制のままで無料、自費生はもともと家庭教師を雇って教育し得る階級が、その地位と財産の寄付という協力で、侵入してきた特権者達である。それを裏づける言葉はダグラススミスが「イギリスの多くのパブリックスクールは、元来貧乏な人達の子供を救済するため、基本財産を設定した上創立する条件のもとに、許可されたものであった筈である、所が今や地位のある特別な階級の、合法的な設得と化している。」〔註12〕

フリー・スクールの名を冠して創立された「財団法人組織の学校」の特質を要約すると、

1　永久的財産を確保している。その収益は教育施設と教師の報酬、一定数の生徒を無料で教育するに足る金額である。

2　創立者は、開校の目的と条件を整えて王と議会に請願し、勅許状によって教育、救貧施設としての「財団法人組織団体」たることが認可され、法によって保護される。

3　学校、施設の管理は、市民又は国民の代表たる委員が、管理委員会を構成し、この委員会に一切が委ねられる。

4　創立の目的にそって、教育施設、救貧施設が創立される。

5　管理委員会は事業遂行のため、詳細な規定を制定する。学校規則に従って校長を選任し、学校経営は校長に一任される。慈善施設規則に従って事務長を選任し、経営は事務長に一任される。

6　委員の選任方法、任期、任務、日常の管理事務担当者の選任、任期、任務、又は会計事務の処理、監査等、規則の上に明瞭に規定し、予め事務処理上渋滞が予想される障害となる事項の廃除に努力している。

このような共通の特質は、公認された、いわゆる公（おおやけ）のものである。高い尊い創立者の意志を体し、時の委員会が無暗に恣意を加えることなく、国民のため市民のため、学校の永続と興隆のため、教師の宗教的信念に基づく教育的献身と、父母達はわが子の心身共に健全にして旺盛な終生の成長を祈って、教師達に協力し努力し維持し続けた事実こそ、われらの最も深く注目すべき点であろうかと、考えている次第である。

註

1　まえがき

(1) Tyrrell Burgess : A Guide to English Schools, 1964, p.68—94.

2　フリー・スクールの意味について

(1) Joan Simon : Education and Society in Tudor England, 1966.p.31, 彼は飾り職組合 (Goldsmiths' Company) に属していた。

3　ウインチェスター校創立前のウインチェスター

(1) A.F.Leach : A History of Winchester College, 1899.

(2) ベネディクト (480—547) がはじめた。西欧修道院でも最古のもの, 529年創立, (キリスト教百科辞典による)

(3) 教師の免許制はヨーロッパで広く行われ, 1179年第3回ラテラン宗教会議 (ローマ法王の宮殿で全カトリック最高の会堂) は, 免許状発行に課税しないときめている。教会は僧正座の高僧, 書記長 (Chancellor) を通じて免許状を交付した, 書記長は管区内の学校を統制し書物の誤りを正し, 僧会の印を保管した。免許に僧職位を要しなくなったのは, 1432年セブンオーク・グラマー・スクールの学校規則に「聖職位のあることを要しない」 (Simon : p.31)

この教会側による教師免許制が, 最終的に廃止されるのは, 1869年の Endowed School Actの21条によってである。(S.J.Curtis : History of Education in Great Britain, 1963, p.18註1)

4　ウインチェスターカレッジ

(1) A.R.Myers : England in the Late Middle Ages, 1963, p.9

(2) Leach : p.90

(3) ditto : p.161

(4) ditto : p.169—170

(5) Howard Staunton : The Great Schools of England, 1877, P.68註1,

(6) Report of Her Majesty's Commissioners appointed to inguire into the Revenues and Management of certain Colleges and Schools, 1864, vol.1. p.143通称クラレンドン報告書, 以後報告書と略す

5　ロンドンの教育

(1) Simon : p.385

(2) ditto : p.23

(3) ditto : p.24

(4) Curtis : p.50

(5) Simon : .p25註1

(6) ditto : p.15

6　セントポールズスクール

(1) 聖書, ヨハネ福音書67, (中央公論社, 聖書p.516)

(2) 仝上, p 515, ペテロ, イエスの言葉通り, 舟の右がわから網を打ったら, 153匹とれた故事による。

(3) Encyclopaedia Britannica, vol.14.

7　クライストホスピタル

(1) Staunton : P.357

(2) ditto : p.358註 1
(3) ditto : p359註 2
(4) ditto : p362註 1
(5) ditto : p363
(6) ditto : p366註 1
(7) エラスムスの大小対話集を読本としたので，この名称が残っている。p.376註による。

8 チャーターハウス

(1) A.H.Tod : Charterhouse, 1905, p. 4
(2) Harold T, Wilkins : Great English Schools, 1925, p.219.
(3) 赤井彰：スペイン無敵艦隊の最後（人物往来社）p.60—63
(4) Tod : p. 8
(5) ditto : p. 10
(6) ditto : p. 12
(7) ditto : p. 11
(8) ditto : 25—6.
(9) 犬丸直：イギリスの私学制度，文部時報，1966年1月号

9 シティ・オブ・ロンドン・スクール

(1) A.E. Douglas-Smith : City of London School, 1965.p. 1
(2) ditto : p.501補遺，カーペンター奨学生一覧
(3) 大野真弓：イギリス史（山川出版社）p.79
(4) Douglas : p.25—6
(5) ditto : p.31
(6) ditto : p.64—5
(7) ditto : p.31
(8) ditto : p.28
(9) ditto : p.42
(10) ditto : p.34—5
(11) ditto : p.40
(12) ditto : p.49
(13) ditto : p.62
(14) ditto : p.74
(15) ditto : p.87
(16) Staunton : p.491
(17) Douglas : p.509
(18) Britannica, vol, 5
(19) Douglas : p.110—11
(20) ditto : p.111
(21) ditto : p.104
(22) Douglas : p.104.Britannica, vol, 7.
(23) Douglas : p.503補遺2主将名一覧

10 財団法人組織の学校

(1) 大野真弓：イギリス史（山川出版社）p.165

(2) Curtis : p.223

(3) ditto : p.231.249.261

(4) ditto : p.229

(5) ditto : p.208

(6) Matthew Arnold : Reports on Elementary Schools 1852—1882, 1908, p.2—7.

(7) Howard Staunton : The Great Schools of England, 1877.

(8) T.J.H.Bishop, RupertWilkinson : Winchester and the Public School Elite, 1967.

(9) Livery Company, Britannica, vol, 14.

(10) Staunton : p.435

(11) ditto : p.493

(12) Douglas : p.59

あとがき

イギリスの教育(3)を漸く書き終った。

イギリスの学校の実態を明らかにするにつれ、日本の学校教育を支える基盤が非常に浅いことを考えている最中に、予想していたことが、早々と追っかけてきた。

大学紛争である。

小学校、中学校、高校にも、懸念すべきことは非常に多い。

イギリスでは二百年前から、学生の反抗事件が沿革史に記録されている。重なものは、

1　一七六八年、イートン校の反抗事件、最上級生全員放校、一八三二年の事件が最後とされている。

2　一七七九年、ラグビー校の焼打事件、軍隊が出動して鎮圧。

3　一七九三年、ウインチェスター校上級生籠城事件、主謀者二九名追放、教頭引退。

4　一八〇五年、ハロー校では校長室爆破未遂事件。

これら大小の事件は、生徒数が増加して凡そ二五〇名、三百名を越える頃に起っている。

イギリスの教育(1)の、トーマス・アトノルドは前校長時代の生徒数三八一名を、管理委員会の承認を得て、奨学生、自費生合せて三百名以下とし、生徒指導を徹底させると共に、個人指導教師制度を最大に活用して学力の充実をはかっている。

チャーターハウスでも最高四八〇名（一八二五年）の生徒を収容したことがあったが、後に最高二百名（一八四五年の管理委員会規則）（二四頁参照）とし、生活指導の徹底を期した。

この方針をさらに徹底させたのは、イギリスの教育(2)に述べた、エドワード・スリングである。彼は一学級最高二五名、一寮は最高三〇名、そして一校最高三百名とし、午前中基礎教科、午後は選択教科とスポーツに熱中させた。このような生活指導中心の教育の底に、強いキリスト者としての信念が流れていた。

今回は、学校が他の何者にも依頼せず、屈せず、校長と教師が互に信じ互に協力して、父母の期待にそう教育を支える、学校基本財産の実態を明らかにし、貧乏であっても能力ある子供が、安心して勉強することの出来る無月謝学校の実態、さらに能力を伸ばすため大学に無料でおくる特別奨学生制度の実態を、明らかにすることを目的とする、この第三集をお送りする。このような教育精神が、過去数百年間も、イギリス国民の血の中に流れていることに、思いを馳せていただけば幸いである。

この第三集の重要資料として、九州大学教育学部、比較教育文化研究施設の貴重な品々を公開され、クラレンドン報告書のゼロックス版を作成提供していただいた、権藤先生、馬越先生はじめ館員の皆様に厚くお礼を申し上げる。さらに応援、激励していただいた岩橋文吉先生、井野正人先生に、深く感謝の意を表し、第四集への出発のことばと致したい。

（昭和四四年二月二八日完了、同七月補筆）

（宮崎女子短大講師、住所　宮崎市大和町一二九ノ二）